
遊戯王～異邦人の行方～

鴉砲丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王〜異邦人の行方〜

【Nコード】

N1950P

【作者名】

鴉砲丸

【あらすじ】

大和五郎は普通の少年だった。ある日彼はライトロードサモナールミナスの精霊と出会い、非現実的な体験をすることになった

プロローグ（前書き）

初めて小説を書きます鴉砲丸です。まだまだ拙い文章ですが忌憚ない感想をお願いします

プロローグ

某県某市某所

どこにでもいそうな普通の少年の部屋から物語は始まる

その日少年は新しくでたデュエルディスクを買ってきた

少年の名は大和 やまぐちだいじろう 大五郎、まあ普通の少年だ

そんな大五郎の趣味はトレーディングカードゲームの一つ、遊戯王だ

小学生の頃から始めた趣味だが、今もまだ続き県大会で優勝するほどの腕前になった

今日もまたデュエルディスクとは別に買ってきたカードパックを開けてレアカードをファイルに入れている

「むう……またファイルがいっぱいになったな……」

大五郎はカードがたくさん入ったファイルを閉じて棚に並べる

そのファイルにはN O . 5と書かれていて今までカードにかけてきた金額が知れてくる

大五郎はカードを一旦引き出しに入れて、自身が使用しているデッキを並べる

ガチデッキ・ネタデッキ合わせて五つのデッキがあるが、その中から普段から使っているガチデッキをデュエルディスクに取り付け、さらにベルトに残りのデッキを取り付けて姿見の前に立ちポーズをとる

「こうやってると遊戯王の世界に行きたくなくなるな」

ただなんとはなしに呟いた言葉だった

しかし、その言葉が全てを変えた

『叶えてやろうその願いを』

「へ?」

どこからともなく聞こえてきた声に呆然とした瞬間

姿見が全身を覆いつくす程の光が発せられ大五郎は目を閉じる

光が止み、目を開けると変わらない自分の部屋だったのでホッと息をつく

その時、左腕に違和感を感じて見てみる

相変わらずデュエルディスクをつけていたが、重量が増していらに金属感が出ていた

大五郎はまさかと思い外を見た

「は……ははは……マジかよ……」

窓の外にはデュエルレーンがありライディングデュエルが繰り広げられていた

つまり遊戯王の世界に来たことを裏付けることだった

第一話『選ばれし者』

急な変化に呆然とするもつかの間、状況についていけずパニックに陥った頭を状況整理して少しずつ落ち着く

頭の中で整理をしていると声が聞こえてきた

『主よ……我が主よ……』

「な、なんだ？どこから声が……」

『ここです主よ』

左腕に付けているデュエルディスクのデッキが淡く光り輝く

大五郎は一番上にあるカードをドロ―する

カードは『ライトロードサモナー・ルミナス』だった

カードを引いた瞬間大五郎の目の前に半透明のルミナスが現れる

『初めまして主』

「うえっ！？ルミナス！？なんで！？………精霊か！？」

『はいその通りでございます』

パニックった大五郎だった。が遊戯王の世界ということ思い出したのだ

『すみません主』

「なんだ急に謝ったりなんかして」

『主をこの世界に連れてきた事についてです』

ルミナスは言いづらそうに目を逸らす

「連れてきた理由？」

『はい。実は主は、この世界において特殊な存在なのです』

「特殊な存在……？」

ルミナスはいと頷き大五郎の前に跪ひざまづく

「ちょっ！？何！？」

『お願いです主。私達を……精霊を助けてください』

「精霊を……助ける？」

『はい。私達精霊の世界があることは主もアニメを見てご存知だと思います。その世界が今危機に陥おちっているのです。それは人間世界の侵食です』

「人間世界の侵食？」

『本来人間世界と私達精霊の世界は交わりません。しかし、あるときを境にゆっくりと境が曖昧あいまいになってきたのです』

ルミナスは跪ひざまづいたまま顔を上げずに喋り続ける

『私達に於いては世界が侵食されるというのは世界が消えると同義なのです。精霊は精霊世界の空気がないと生きていけません。今私も精霊世界よりカードを通して人間世界に存在しているのです。そして世界が侵食されるきっかけとなったのがユベル事件です』

「ユベル……まさかGXのあれか!？」

ユベルと聞いた大五郎は一つだけ思い浮かぶ事項があった

それは遊戯王デュエルモンスターズGX第三期シリーズにあった異世界編だった

『あの時、僅かながらですが世界と世界の境界が揺らぎ小さな……本当に小さな歪みが残りました』

ルミナスは顔を上げると手を大五郎の前にだす

すると手の上に丸い空間が現れ中の景色が変わる

『これが現在の精霊世界です』

そこに映された世界に大五郎は愕然とした

そこには姿が消えていく精霊、維持するのがやっとなのか薄くなり地に伏せる精霊、他の精霊を襲い力を奪って姿を維持する精霊等、阿鼻叫喚な映像が映しだされる

「こ、これが精霊世界なのか……？」

『はい……これは空気の減少により力が無くなりつつある地域です。ですがもう精霊世界の五割はこのような状況です』

ルミナスは映像を消すと再び俯く

しかし先程とは違い肩がわずかに震えている

『お願いします主、私達を……精霊を……精霊世界を助けてください……』

俯いたルミナスの目から涙が流れ落ちる

それを見た大五郎は決断する

「大五郎だ」

『え？』

大五郎の発した言葉にルミナスは顔を上げる

大五郎はルミナスと同じ視線になり手で涙を拭う

「主なんて堅苦しい呼び方はやめてくれ、大五郎って呼んでくれルミナス」

『主……いいえ、大五郎よろしくお願いします』

「ああよろしくルミナス」

二人は固く握手をして笑いあう

「そういえばルミナス、俺が特殊な存在だと言ってたがあれはどういう意味なんだ？」

『大五郎は私達、精霊世界に行くことの出来る唯一の人間です。かつてはそれなりに存在していました。しかし、精霊世界が侵食され

るとその存在も段々と減っていきました……しかし私は諦めず捜し続けました。そして、違う世界にその存在を見つけました。それが大五郎あなたです」

「なるほどな……ん？この世界は5D・Sだよな？だったら龍可がいるんじゃないのか？」

『はい確かに存在しますが、今の彼女に昔ほどの力はありません』

「昔ほど？」

『ここは彼の世界より数十年経過した世界です。大五郎にはこの世界でシグナーに出会い力を継承して貰います』

ルミナスが大五郎に手を向けると、腰のデッキケースとデュエルデッキのエクストラデッキからカードが飛び出す

飛び出したカードはシグナーの龍、スターダストドラゴン、レッドデーモンズドラゴン、ブラックローズドラゴン、エンシェントフェアリードラゴン、ブラックフェザードラゴンのカードだった

『このカードにシグナーの力を継承して貰います。シグナーには龍可を通して話をつけてもらっています』

大五郎は五枚のカードを胸のポケットに仕舞い、右手を左手に叩きつける

「よし！じゃあ早速行くか！」

意気揚々と外に出てシグナー達の元に向かうのだった

おまけ

「……D・ホイールに乗るの？」

『はい当然です。クリアマインドにバーニングソウル、この二つも極めてもらいます。ついでにライディングデュエルもです』

「え……いや俺バイク乗れない……」

第二話『V S ・ E ・ H E R O 』改

ルミナスに呼ばれて二年程の月日が流れた

俺はシグナーである不動遊星、ジャック・アトラス、クロウ・ホーガン、十六夜アキ、龍可、双子の兄の龍亜と出会いデュエルの修業とD・ホイールの技術習熟、力の制御に明け暮れた

いや……ここまでいい……ここまで……

デュエルの修業と言ったけど訂正、拷問だ

なんだあのチートドロは

一ターンで何故シューティングスタードラゴンが呼べるんだよ

なんだスカーレットノヴァドラゴンの攻撃力6000って

何故ポンポンあんな都合よく出てくるんだBFはよ

もう泣いていいよね？

「てか俺も負けず劣らずの引きなんだよなあ……」

『気にしたら負けです』

「この世界のドロ―はチート機能付きなのか……」

『気にしたところでなにかが変わるわけではないので早く校長に会いに行きましょう』

校長、つまりデュエルアカデミア本校の校長、鮫島校長である

え？飛びすぎだって？

あえて言わせてもらおう、思い出させないでくれorz

とりあえずザックリと説明すると……

一、シグナーから受け継いだ力で過去に戻る

二、ただし行き過ぎる

三、時期的にはGX一話目前

四、後ろ盾が必要だったのであの手この手でペガサス会長と接触

五、ペガサス会長の協力を得てデュエルアカデミアに入学

「なんで入学なんだ……」

『まあ大五郎は見た目、歳より若く見えますから』

現状二十歳の俺が高校生に見えるのかよ……

そうこうしている内に校長室に到着する

「失礼します」

中に入ると坊主頭の髭をはやした壮年の男性が椅子に座り、その隣に金髪の外人が立っていた

つまり鮫島校長とクロノス教頭だ

「ようこそ我がデュエルアカデミアへ。私が校長の鯨島だ」

「ワタシーは、教頭のクロノス・デ・メディチなノーネ」

出た！なノーネ！

こいつ最初はエリート主義だからなあ

「初めまして、大和五郎と言います。よろしくお願いします」

「うむ、元気があってよろしい！大和くんの事情はペガサス会長より聞いているが……本当にオシリスレッドからでいいのかね？」

「はい。特別だからとその好意に甘えたくはないので一番下から自力で上りつめて行くつもりです」

「いい心掛けだ。精進して慢心しないようにね」

鯨島校長は素晴らしいと言わんばかりの笑顔で頷く

対照的にクロノス教頭はやや不満顔だった

まあペガサス会長と言う一種のブランドが付いてる俺がオベリスクブルーに入らなかったからだろう

「じゃあレッド寮への地図は持ってるね？寮で大徳寺先生が君のことを首を長くして待ってるよ」

俺は最後に軽くお辞儀をして退室する

地図を頼りにレッド寮に辿り着く

……生で見るとボロボロだなマジで

食堂に入ると大徳寺先生がファラオを抱えて座っていた

先生に挨拶をして部屋に案内してもらった

四人部屋で既に三人いることを聞かされる

中に入ってびっくりした

「お？どうやら最後の一人が来たみたいだぜ」

「これでこの部屋はいっぱいいっぱいだねアニキ」

「Z Z Z……」

マジですか！

まさかの主人公、遊城十代達と同室であった

謀ったなシ。ア！

『誰ですかそれは……』

大徳寺先生は俺の紹介を終えると部屋に戻っていった

途端、十代が早速話かけてくる

「俺は遊城十代！こっちが翔であっちで寝てるのが隼人な。なあ早速デュエルしようぜ！」

「アニキ、もう一人来るって知ってずっと待ってたから……」

さすが十代だ、もうデュエルの準備ができている

なら俺もこのデッキで……

ちなみにあの地獄の特訓の最中に更にデッキが増えたりしている

それでもしないとあの人達に勝てないからマジで

「いいぜ、デュエルはお互いわかりあう一番手っ取り早い手段だからな」

俺達はレッド寮の前に出てデュエルディスクを構える

「デュエル!」

D a i g o r o L P 4 0 0 0

J u d a i L P 4 0 0 0

「俺の先攻ドロー！」

十代に先攻は取らせない

なんせこのデッキはターン目にこいつを貼ればなかなか面白いことになるからなあ

「俺は手札からフィールド魔法フューチャーヴィジョンを発動！」

フィールド魔法カードゾーンにセットすると宇宙空間のような場所に辺りが変わる

「おおっ！すっげー！なにが始まるんだ！」

十代の子供の様な反応に俺は思わず笑みを浮かべる

「このカードが存在する限り、召喚したモンスターはゲームから除外され、次の自分のスタンバイフェイズに戻ってくる。俺はフォーチュンレディ・ライティーを召喚！フューチャーヴィジョンの効果でゲームから除外！この瞬間ライティーの効果発動！このカードがカード効果で除外された時、デッキから『フォーチュンレディ』と名の付いたモンスターを特殊召喚する！来いフォーチュンレディダ

ルキー！」

フューチャーヴィジョンの効果でライティーが消えると同時にダルキーが現れる

「フォーチュンレディダルキーの攻撃力・守備力はレベル×400ポイント……ダルキーのレベルは5！よって攻撃力・守備力は2000だ！」

俺の説明が終わるとダルキーのステータスが変動する

「魔法カードフォーチュンフューチャーを発動。除外されている『フォーチュンレディ』と名の付くカードを墓地に戻すことでデッキからカードを二枚ドロウできる。俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ」

俺は除外したライティーを墓地に戻してカードをドロウし更にセツトしてエンドした

墓地に戻したライティーのカードが一瞬淡く光、カードからライティーが現れる

そうルミナス以外にも俺には精霊がついてたりする

『いきなり除外なんて酷いよー！』

「すまんすまん、まあ見てなって俺のデュエルを」

『ちゃんと勝ってよね♪』

ちなみに小声で喋ってます

さすがにぶつぶつ独り言を聞かれたくはないからな

「ワクワクするぜ！俺のターンドロー！魔法カード融合発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合！来いE・HEROフレイムウイングマン！」

早っ！？もうフレイムウイングマン出てきたし

「更に魔法カード融合回収！墓地の融合と融合に使ったモンスターを手札に加える！俺は融合とバーストレディを戻すぜ！」

更に融合とバーストレディを回収か……回りすぎだろデッキ

「バトルだ！フレイムウイングマンでフォーチュンレディダルキーを攻撃！フレイムシュート！」

ダルキーの攻撃力は2000、確かに攻撃力はフレイムウイングマンが上回っているが……

「リバースカードオープン！タイムパッセージ！自分フィールドのフォーチュンレディー体のレベルをエンドフェイズまで3つ上げる！」

ダルキーの回りにデジタル数字が現れ高速で数字が動き、レベルが上がった時の攻撃力の3200で止まる

「うげっ！？3200に上がった！？」

「バトルは続行だ！迎え撃てダルキー！」

フレイムウイングマンが飛ばしてきた炎を手に持った杖で弾き返す

炎が当たったフレイムウイングマンはそれによって破壊される

「くうつ！？フレイムウイングマンが……」

LP4000↓2900

「更にダルキーのモンスター効果発動！自分フィールドのフォーチュンレディと名の付いたモンスターが戦闘でモンスターを破壊したとき、墓地からフォーチュンレディと名の付くモンスターを特殊召喚する！蘇れ！フォーチュンレディライティー！」

「くつ……カードを二枚伏せてターンエンド」

十代は二枚の伏せカードをセットしてターンエンドする

ふむ……ちょっとやりすぎたか……？

いや……手加減するほうが失礼だよなやっぱ

「なあ大五郎！」

「なんだ？」

「楽しいな大五郎！見たことのないカードに効果！なあ次はどんなカードが出てくるんだ！？」

この状況で笑えるとはな……

やはり退屈しないな、デュエルが好きな奴は

「俺のターンドロー！」

ドローしたカードを確認

……またタイムパッセージかまあいいか

「スタンバイフェイズ時にダルキーとライティーの効果発動！それぞれのレベルは1つ上がる！」

ダルキー A T K 2 0 0 0 ↓ 2 4 0 0

ライティー A T K 2 0 0 0 ↓ 4 0 0

「このままバトルだ！ダルキーでダイレクトアタック！」

ダルキーは杖を振り、魔力弾を飛ばす

「させるか！ 罨発動！ 和睦の使者！」

十代の前にリバースした和睦の使者が光り、ダルキーの魔力弾を消し去る

「更にチェーンして非常食発動！ 和睦の使者を墓地に送りライフを1000回復する！」

LP 2900 ↓ 3900

非常食があつたか…… しかも場が空になった……

「俺はカードを一枚セットしてターンエンド」

俺はタイムパッセージをセットしてエンドを宣言する

モンスターを引けないのは少しやばいかも知れないな

「俺のターンドロ―！魔法カード強欲な壺を発動！カードを二枚ドロ―する！更に魔法カード天使の施し発動！カードを三枚ドロ―して手札から二枚墓地に送る！そして手札からバブルマンを召喚！バブルマンを召喚したとき！フィールドに他のカードがない場合デッキからカードを二枚ドロ―する！」

本当にあいつはチートドロ―ばっかだな

てかありえないだろ普通に！？

「だがフューチャーヴィジョンの効果でバブルマンは除外される」

「でもまだまだ俺のターンは続いてるぜ？行くぞ！俺は手札から融合発動！手札のバーストレディとクレイマンを融合！来い！E・HEROランパートガンナー！」

十代のフィールドにランパートガンナーが守備表示で召喚される

「更に魔法カードミラクルフュージョンを発動！墓地のクレイマンとスパークマンをゲームから除外してE・HEROサンダージャイアントを召喚！」

うおい！？引き良すぎだろ！？

「おいおいおいマジかよ……」

さすがに俺もげんなりするぜこんな目の当たりにしたら……

「サンダージャイアントの効果発動！手札を一枚捨てることで元々の攻撃力がこのカードより低いカードを一枚破壊する！フォーチュンレディの攻撃力は『？』だ！つまり攻撃力はゼロ！俺が選択するのはもちろんダルキーだ！」

サンダージャイアントは両手をダルキーに向けて電撃を飛ばしてきた

「ヴェイパースパーク！」

十代がそう叫ぶとダルキーは破壊された

……やっぱ主要モンスターには技名があったほうがいいのかなあ？

「バトルだ！サンダージャイアントでライティーに攻撃！ボルティックサンダー！」

『きゃあああああ!』

「ライティ―!?くっ……」

ダルキーと同じようにサンダージャイアントの電撃でライティ―は破壊された

LP4000↓2000

「更にランパートガンナーで攻撃!ランパートショット!」

ランパートガンナーの攻撃力は2000

本来ならジャストライフでこちらの負けだが……

「守備表示のランパートガンナーは攻撃力を半分にしてダイレクトアタックができる!……いつもの癖で守備表示で出したから決まらなかつたなあ」

そう、ランパートガンナーは守備表示のため攻撃できない

だから効果によって攻撃力を半分にしてダイレクトアタックするしかなかったのだ

「十代、このプレイミスはでかいぜ？」

「なら逆転して見せてくれよ！」

十代は子供のような無邪気な笑顔を浮かべる

「いくぜ……俺の、ターン！」

これが俺のデステイニードロー！……なんてな

俺はドローカードを確認する

「俺は強欲な壺を発動！カードを二枚ドロー！」

！この二枚ならいける！！

「俺は二枚目のライティーを召喚！フューチャーヴィジョンの効果でゲームから除外と同時に効果発動！デッキからフォーチュンレデ

イと名の付くモンスターを特殊召喚する！来い！フォーチュンレディファイリー！」

ライティーが背景に溶け込むと同時にファイリーがどこからともなく現れる

「ファイリーのモンスター効果！このカードがフォーチュンレディと名の付くカードによって特殊召喚された場合、相手モンスター一体を破壊しその攻撃力分のダメージを与える！対象はサンダージャイアントだ！」

「なに！？くっ…！」

LP 3900 ↓ 1500

まだまだ！このターンで決める！

「手札から速攻魔法、ディメンションマジックを発動！自分フィールドの魔法使い族モンスター一体をリリースして相手モンスター一体を破壊し俺は手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚できる。現れる！ブリザードプリンセス！」

ランパートガンナーは鎖で繋がれた棺の中に閉じ込められ、棺が開くと中からブリザードプリンセスが飛び出てくる

「ブリザードプリンセスでダイレクトアタック！フリージングプレス！」

ブリザードプリンセスは手に持った氷のモーニングスターのような武器を振り回して十代を叩き潰した

「うおっ！？」

LP1500↓0

ライフがゼロになりデュエルが終了するとモンスターは消えていくがライティールとブリザードプリンセスだけは半透明になって残った

「ありがとな二人共」

「なに、妾もあの戦いに些か興奮していたから召喚してくれて嬉しかったぞ」

「除外されちゃったけど私の力が勝利呼んだから嬉しいな♪」

俺は二人の言葉に笑みを浮かべる

二人とある程度話をしてカードをデッキに戻すと同時に二人の姿は消えていった

「へえーお前たくさん精霊がついてるんだな」

「まあな。その話振りだとお前にも精霊がついてるんだな？」

知っているが聞いておかないとな

状況から考えてつまりJK

「いるぜ！俺の相棒はハネクリボーだ！」

十代がハネクリボーの名を言うと、半透明のハネクリボーが出てくる

……毛玉だなあ

「ふっ……いい相棒を持ったな十代」

「ああ！最高の相棒だぜ！」

十代と精霊の話をしながら寮に戻る

話していて思ったことは一つ

やっぱりこいつは退屈しないな

第三話『ポニーテールは正義ヒーハー!!』(前書き)

今回からオリカが登場します

はつきり言ってチートです

ですのでオリカ嫌いチート嫌いか作者嫌いな人はバックしてください

……嘘です作者嫌いでも見てください

第三話『ポニーテールは正義ヒーハー!!』

あれから数日経ち、俺は何事もなくアカデミアでの生活を送っていた

万丈目と十代のデュエルが見れなかったのは残念だがな

「だが翔が上の空だったから今日はあの日か……」

翔ラブレター誘拐事件

翔に偽物のラブレターをクロノス教頭が仕掛けて女子寮に行かせて問題にする

普通に考えれば教師がなんてことをと思うが……

「あのエリート主義はやはり気に入らないな」

格下だからと弱いからとドロップアウトだと公然と言うあの態度は嫌いだ

「デュエルは心から楽しみ、相手をリスペクトするものだ。それを相手を蔑みながら行われるのは不愉快だな」

デュエルは楽しむものなのにな……はあ……

「……やめだやめだ。こんなこと考えても今は無駄だ」

俺は思考を打ち切ると、数あるデッキケースから一つを取り出す

「早く完成させたいな……俺だけのデッキを……」

デッキケースの中にはまだ数枚しかカードが入ってない

俺が持つデッキは遊星達や元の世界で他の人が使っていたデッキを俺なりにアレンジしただけのものだからだ

カードケースから一枚を抜きだす

「ルミナス」

俺が名を呼ぶと、背後にルミナスが現れる

『大五郎、焦らなくても大丈夫です。私があなたに答えたようにいずれあなたの元にカードの方から寄ってきます』

ルミナスは両手で優しく俺の手を包み込む

『シグナーの方々も言っていました。信じていればカードが答えてくれると』

「……そうだな、ありがとうルミナス」

『いえ、大五郎の元気がでただけで私も嬉しいですから』

そう言ってルミナスは姿を消していく

俺はカードをケースに入れていつもの場所に戻る

ちなみにこの部屋は三人部屋のところを四人で使っているため目茶苦茶狭い

だからカードケースやカードを置く場所にはかなりスペースを取ら

れた

くくく
♪

カードを整理していると携帯電話が鳴り出した

ちなみにこの世界に俺の戸籍が無かったためペガサス会長が保護責任者となり戸籍を用意してくれた

そして連絡用にと携帯電話まで用意してくれたのだ

俺はカードをテーブルに置いて携帯電話にでる

「もしもし？」

『久しぶりデース大五郎ボーイ』

携帯電話からはくれた本人からの声が聞こえてきた

余談だがこの携帯には海馬社長と武藤遊戯の番号が入ってたりする

「ペガサス会長、どうしたんですか急に電話なんて？」

『大五郎ボーイに朗報デース。シンクロ召喚のシステムが完成しました』

俺はその言葉を聞いてニヤリと笑う

「それは確かに朗報ですね。これで全てのデッキが使えます」

『イエースその通りデース。大五郎ボーイのデッキは全て使えます。ですがドラゴンデッキは自重してもらいマース』

ドラゴンデッキ……俺の浪漫あふれるドラゴンビートのデッキだ

だが、青眼の白龍が入ってるためこちらの世界では使えない（カード的な意味で）

「わかりました、いろいろとありがとうございますペガサス会長」

『礼は不要デース。世界を救うためなら私達は全力であなたをサポートするのデース。では今日はこの辺りで切らせてもらいマース』

「わかりましたでは」

俺は電話を切ってからガッツポーズをする

これで戦術の幅が広がった

あとは実際にデュエルして試すのみだ

「さて、ちょっと外の空気でも吸ってくるか」

俺はデュエルディスクとを装着して散歩に出かける

外はすでに暗くなっていたが俺は気にせず歩いていく

一時間ぐらい経ったところでレッド寮に戻ると十代が部屋から飛び出してきた

「おお大五郎！丁度よかった！翔が誘拐されたんだ！ついて来てくれ！」

ああそういえばそうだったな

シンクロ召喚システムのおかげですっかり忘れてた

「わかった場所はわかるのか？」

「ああ、女子寮近くの湖だ」

それだけ聞くと俺は十代とともに駆け出した

しばらく走ると目の前に湖が見えてきた

近くにボートがあり、湖の中央にボートがあり二人の女子と翔がいるのが見てとれる

……二人？

「あれか！大五郎ボートを漕いでくれ！」

十代はそう言ってボートの先に乗る

手漕ぎは疲れるんだがなあ……

俺はオールを掴むと力を振り絞って漕ぎだした

ボートに近づくと向こうから話しかけてきた

「来たわね遊城十代……と誰かしら？」

「俺は大和大五郎、ルームメイトさ」

「そう、私は天上院明日香よ」

「アニキ〜！大和くん！」

明日香と互いの自己紹介を終えると翔が十代と俺を呼ぶ

「翔、お前何をしたんだ？」

「こいつはわたし達のお風呂を覗いたわ」

「覗いてないッス！濡れ衣ッス！」

……なんだろう、翔を弄りたくてウズウズする

「覗きとは……このムツツリめ」

「だから覗いてないんだってば！」

「覗いた側はだいたいそう言うものさ」

「だ〜から〜！」

さすがにこれ以上はかわいそうだな

「冗談だ、で明日香だっけ？こうして呼んだからには妥協案があるんだろ？」

「ええ、わたしと十代でデュエルをしてそっちが勝ったら見逃して

あげるわ」

「よし！そうと決まれば早速……」

「待つて」

いざデュエルが始まろうとしたとき

翔を挟んで逆側に立つ黒髪のポニーテールに金のメッシュが入った
女子が待ったをかける

「そのあなた」

「俺？」

「あなたはわたしとデュエルよ」

俺は何故だと思いつつ相手を見る

……ふむどうみても原作にはいなかった人物だな

まあ半ば原作を思いだせんが

「あなた達二人が勝てば見逃すと言っただろう？」

なるほど、俺がいることでのイレギュラーか

「いいだろう、そのデュエル受けてたっ」

相手は俺が承諾したのを確認すると自己紹介してきた

「わたしは神宮司マリナ」

「わかってると思うが大和大五郎だ」

神宮司マリナか……やっぱりイレギュラーかぁ……

まあなんとかなるだろデュエルも始まったしそっちに集中するか

勝負は原作通り十代の勝利で終わった

「次は俺達だな」

「ええ」

俺とマリナはデュエルディスクを構える

にしても無口な奴だな

「デュエル！」

D a i g o r o L P 4 0 0 0

M a r i n a L P 4 0 0 0

「私のターンドロー」

さてどんなデッキなんだろうか

俺はマリナの一挙手一投足に注目する

ドローしたカードを見ると一瞬顔をしかめる

「モンスターをセット、カードを二枚伏せてターンエンド」

ふむ……手堅いタクティクスだな

「俺のターンドロー！」

まあ序盤だし相手の戦略がわからない以上むやみに攻めるのは止め
とくか

「俺もモンスターをセットしてカードを二枚伏せてターンエンドだ」

「エンドフェイズに速攻魔法サイクロンを発動。右側を破壊」

ちい……奈落が破壊された

「私のターンドロー」

ドローしたカードを見てまたもや顔をしかめる

事故ってるのか？

「私はトライデントウォリアーを召喚。効果により手札からチューナーモンスター、ジャンクシンクロンを特殊召喚」

チューナーだと！？

そうか！それであんな渋い表情をしたのか！

この世界にはシンクロ召喚システムが無かったから召喚出来無かったんだ！

それにシステムが完成したのは今日だ

だから知らないはずだシンクロ召喚ができることを

「マリナ！」

「！なに」

マリナは俺の声に一瞬驚くがすぐにまた無表情になる

「シンクロ召喚は今日から使えるぜ？」

「!」

「シンクロ召喚？」

俺の台詞にマリナは驚愕し回りは疑問符を浮かべる

マリナはしばらく驚いたが落ち着くと俺を見据えながら話してくる

「何故教えたの？教えなければあなたは……」

「デュエルは楽しくだ、俺だけ有利なんて嫌だぜ」

俺がそう言っているとマリナはフツと笑う

「お人よし、私はモンスターを反転召喚、スターダストシャオロン」

なるほど破壊耐性付きだったか

「レベル1スターダストシャオロン、レベル4トライデントウォリアーにレベル3ジャンクシンクロンをチューニング」

「チューニング!？」

「な、何が起こってるの？」

「おお、すっげー！何が始まるんだ！」

「集いし願いが新たに輝く星となる、光り差す道となれ」

ジャンクシンクロンが三つの輪になり残りの二体がレベル分の光になり輪の中で一直線に並ぶ

「シンクロ召喚、飛翔せよスターダストドラゴン！」

一際強く光るとフィールドにスターダストドラゴンが現れる

「これが……シンクロ召喚……」

「す、すごいッス……」

「うおおおカッコイイ！」

それぞれが三者三様の感想を述べる

「墓地のスターダストシャオロンの効果発動、スターダストドラゴンが召喚された時墓地から特殊召喚する」

そしてスターダストシャオロンが蘇る

「バトル、スターダストドラゴンで攻撃、シューティングソニック」

俺のセットモンスターのライコウが破壊される

「ライトロードハンターライコウの効果発動！このカードがリバーシしたときフィールドのカードを破壊することができる。さらにデッキからカードを三枚墓地に送る。俺は破壊対象を取らない、よってカード三枚を墓地に送るだけだ」

「えっスターダストドラゴンを破壊しないんスか？」

ああそうか……スタダの効果は知られてないんだっとな

「スターダストドラゴンはフィールドのカードを破壊する効果を無効にする効果を持っている」

「え！？それってサイクロンとかも……」

「そうだ。だからライコウの破壊効果を使わなかったんだ」

「それにスターダストは自身の効果でリリースした場合、エンドフェイズに復活する」

汎用性が高く、シンクロに縛りがないためシンクロを扱うデッキには必ずと言っていいほど入っているモンスターだ

「私はカードを一枚セットしてターンエンド」

「俺のターンドロ―！」

俺はドロ―したカードを手札に加えて相手のフィールドを見る

「（スターダストドラゴンにジャンクシンクロン……おそろくマリナのデッキは遊星をモデルにしたデッキだな……）だからといって負けるつもりはないがな。俺は魔法カードソーラーエクステンジを発動！」

「ソーラーエクステンジ……ライトロードデッキ……」

「フツ……俺はライトロードパラディンジェインを墓地に送りカードを二枚ドロウしてデッキからカードを二枚墓地に送る」

俺はドロウしたカードと墓地に行ったカードを見て思う

「あと一手だな、さらに手札から魔法カード光の援軍を発動！デッキからカードを三枚墓地に送りデッキからライトロードサモナールミナスを手札に加える！」

『私の出番ですね』

「俺はライトロードサモナールミナスを召喚！ルミナスのモンスター効果発動！手札を一枚墓地に捨て墓地からライトロードと名の付くLV4以下のモンスターを特殊召喚する！俺はライトロードパラディンジェインを特殊召喚！」

『今ここに正義の聖騎士よ復活せよ！ジェイン！』

ルミナスの両手が光に包まれ、その両手を上に向けるとルミナスの隣にジェインが現れる

「墓地のゾンビキャリアの効果発動！手札を一枚デッキの一番上に置くことで特殊召喚できる！さらに墓地のグローアップバルブの効果！デッキの一番上のカードを墓地に送り自身を特殊召喚する！そしてグローアップバルブの効果で墓地に落ちたライトロードビーストウオルフの効果発動！デッキから墓地に送られた場合特殊召喚できる！」

「一ターンでモンスターを五体も！？」

「すっげえ！しかもチューナー……だっただっけ？それも二体いるぜ！一体どんなモンスターが出て来るんだ！」

「すごいッス！これなら勝てるッスよ！」

俺のフィールドに揃えられたモンスターを見て十代達は驚いていた

まあこの時代はフットワーク重いからなあ……

「すごい……」

「ライトロードの真の力を見せてやろう！LV3ライトロードサモナールミナスにLV1グローアップバルブをチューニング！苦境に陥る仲間の元に、覚醒せし正義の召喚師は現れる！シンクロ召喚！輝け！ライトロードサモナーマスタールミナス！」

星になり、グローアップバルブの輪に入りシンクロ召喚されるルミナス

その姿は髪が少し伸びて肩にかかり手には杖を持ち、服装はローブになり露出は減ったが額には緑色の宝石が付いたサークレットを着けている

ライトロードサモナーマスタールミナス

LV4 ATK1700 DEF1000 光属性 魔法使い族

シンクロノ効果

チューナー＋ライトロードサモナールミナス

手札を一枚捨てることで、シンクロモンスター以外のライトロードと名の付くモンスターを特殊召喚できる

「さらにLV4ライトロードビーストウォルフ、LV4ライトロードパラインジェインにLV2ゾンビキャリアをチューニング！光のもとに集いし戦士よ！今こそ悪をくじく剣となれ！シンクロ召喚！煌めけ！ライトロードソードマスタークラウド！」

ゾンビキャリア、ウォルフ、ジェインの三体でシンクロ召喚を行うと、白を基調とした軽鎧と外套に身を包み二本の剣を携えた剣士が現れる

……………これなんて白エミヤ？

ライトロードソードマスタークラウド

LV10 ATK3000 DEF2600 光属性 戦士族

シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外のライトロードと名の付くモンスター二体以上

このカードのシンクロ召喚の成功時にデッキからカードを五枚墓地に送ることでのその中のライトロードと名の付くカード一枚に付きこ

のカードの攻撃力はエンドフェイズまで500ポイントアップする。ターンに一度、手札のライトロードと名の付くカードを捨てることで相手フィールド上のカードを一枚破壊する。このカードが自分フィールド上に存在するかぎり自分のエンドフェイズにデッキからカードを五枚墓地に送る

「そ……そんな……」

「ライトロードソードマスタークラウドのモンスター効果！召喚成功時にデッキからカードを五枚墓地に送りその中のライトロードと名の付くカードの枚数×500ポイントアップする！」

俺はカードを五枚墓地に送る

送られたのは激流葬、ソーラーエクステンジ、ライトロードドルイドオルクス、ライトロードモンクエイリン、ライトロードスピリッツシャイアの五枚だ

「ライトロードと名の付くカードは三枚よって攻撃力は1500アップする！まだまだいくぞ！リバーズカードオープン！リビングデッドの呼び声！ライトロードマジシャンライラを特殊召喚！そしてライラの効果発動！ライラを守備表示に変更することで魔法・罠カードを一枚破壊する！俺は右のカードを破壊！」

「……！これ以上好きにはさせない！リバーズカードオープン！バ

スターモード！スターダストドラゴンをリリースしてスターダストドラゴン／バスターを特殊召喚する！」

な、なんだってー！

スタダがスタバになっただと！？

……文章にすると弱そうだな

「仕方ないか……バトルだ！ライトロードソードマスタークラウドでスターダストドラゴン／バスターに攻撃！煌めきの剣群！」

クラウドの両手にある剣が光り輝き、それを交差させながらスタバに飛び掛かる

「フツ……リバーズカードオープン！くず鉄のかかし！相手の攻撃を無効にしてフィールドに再セットする！」

スタバの目の前に飛び出したかかしにクラウドは弾き飛ばされ元の場所に戻った

「再度使える罠カード……中々厄介なカードね……」

「いいなああのカード……」

「ていうか二人とも半端ないツス」

くず鉄のかかしかよ……シャオロンも破壊耐性ついてるからルミナスじゃあどうしようもないな

「俺はこのままターンエンド。エンドフェイズにライラの効果で三枚、クラウドの効果で五枚デッキから墓地に送る。そしてクラウドは効果が切れて攻撃力は元に戻る」

「私のターンドロー！」

先程から気分が乗ってきたのかプレイの一つ一つに気合いが入ってるマリナ

「私は手札から強欲な壺を発動！カードを二枚ドロー！手札のボルトヘッジホッグを墓地に送り手札からクイックシンクロンを特殊召喚！更に墓地のボルトヘッジホッグの効果発動！フィールドにチューナーが存在するとき墓地から特殊召喚できる！」

マリナの場にデフォルメしたガンマンのモンスターといくつものボルトが生えたネズミが現れる

「LV2ボルトヘッジホッグ、LV1スターダストシャオロンにLV5クイックシンクロンをチューニング！高速より生まれし肉体よ、革命の時は来たれり、勝利を我が手に！ きらめけ、フルール・ド・シュヴァリエ！」

は！？シュヴァリエ！？

いや確かにクイックでだせるが……

ここはデストロイヤーが一番……

「……部屋にジャンクデストロイヤー忘れたの」

俺の視線に気付いたのかマリナは恥ずかしそうに目を逸らし顔を赤くしながら答える

しかしそれもすぐにおさまり、先程のような楽しそうな笑顔になる

「まだ私は通常召喚をしてない。手札からシンクロンエクスプロー

ラーを召喚！効果発動！墓地のシンクロンと名の付くモンスターを特殊召喚できる！クイックシンクロンを召喚！LV2シンクロンエクスプローラーぬ！LV5クイックシンクロンをチューニング！集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれニトロウオリアー！」

ヤバイ！？遊星がクラッシュタウンで1ターン3キルやったモンスターだよ！？フィニッシャーだよ！？

なんかマリナもニヤリと笑ってるし

「ニトロウオリアーはモンスターを戦闘で破壊した場合、守備表示モンスターを攻撃表示に変更して続けて攻撃できる！」

「ええっ！？そ、それじゃあ……」

「ルミナスを破壊してライラを攻撃表示にして連続攻撃すれば2200のダメージ、更にスターダストドラゴンノバスターでクラウドに相打ちすればから空きの所にフルール・ド・シュヴァリエに攻撃されておしまいね」

うん明日香の言う通りだね

「でもあいつはまだ諦めてないみたいだぜ？」

諦めるわけがないだろこんなに楽しいデュエルをな！

「バトル！ニトロウオリアーでルミナスに攻撃！ダイナマイトナックル！」

「墓地のネクロガードナーの効果発動！このカードを除外すること
で一度だけ戦闘を無効にする！」

ニトロウオリアーの攻撃は墓地から飛び出してきたネクロガードナーに阻まれた

「ならフルール・ド・シュヴァリエで攻撃！フルール・ド・オラー
ジュ！」

「手札のオネストの効果発動！このカードを墓地に送ること
で相手モンスターの攻撃力分自分フィールドの光属性モンスター攻撃力を
アップする！」

「させない！スターダストドラゴン/バスターをリリースして効果
を無効にして破壊する！」

オネストがルミナスに力を授けようとするがスタバがオネストを掻っ攫って消えていった

ってヤバい！？

ルミナスが破壊されたら戦略的にキツイ……

シュヴァリエがルミナスの目の前までやってきてレイピアを構える

その時だった

『大五郎！』

『！？ルミナス！』

『手札もフィールドに伏せカードが無いからと諦めるあなたではないはずです。デッキを……私達を信じて使ってるデッキを信じてください』

……そうだなそうだな

手札・デッキ・フィールド……そして墓地があるんだ

可能性はゼロじゃない！

まだ希望はある！

「墓地の罨発動！閃光の障壁！」

ルミナスにレイピアが当たる寸前に光の壁が現れて攻撃を防ぐ

「墓地で発動する罨！？」

「そんなカードがあるんスカ！？」

「すっげえ！ワクワクさせやがるぜ！」

「な………そんな………」

「このカードは墓地に五種類以上ライトロードがいてライトロードと名の付くモンスターが攻撃された時に発動できる。このカードとライトロードと名の付くカードを五種類ゲームから除外することで

戦闘を一度だけ無効にする！そしてフィールドにライトロードと名の付くモンスターが三体以上存在するときこのカードの発動と効果は無効にできない！」

俺はウォルフ、オルクス、シャイア、ライニャン、ライコウと閃光の障壁を墓地から取り出す

あつぶねえ……すっかり忘れてた……

「……エンドフェイズにスターダストドラゴンノバスターはフィールドに戻ってくる」

再び戻ってくるスタバ

こいつがいる限り魔法も罫もモンスター効果すら使えないからなあ

……

てかあれだ、こっちに来て思ったことなんだが……

オリカ半端ねえ！！

命削りとかアニメ効果天よりの宝札とかOCGじゃ絶対ありえない効果ありすぎだろ！？

まあそのおかげで助かったけどなフウ……

「……いろいろと驚いたけどもうあなたに打てる手はない。あなたに手札は無く伏せカードもない。デッキも残り少なく私の場にはスターダストがいる。もはや万に一つの勝ち目はない。サレンダーしたほうがいい」

「サレンダー？冗談、このドローが逆転の一手なんだ。刮目しな！これが俺のデイスティニードローだ！」

俺はデッキに手をかけカードをドローする

「ドロー……！」

俺は手首を帰してカードを見る

「マリナ」

「……………」

「俺の……勝ちだ！」

俺はドローしたカードをデュエルディスクにセットする

「俺は閃光の導き手を召喚！」

俺のフィールドに白い法衣を着た壮年の男性が召喚される

「閃光の導き手の効果発動！フィールドのライトロードと名の付くモンスターの数だけカードをドロウする！」

「無駄ね。スターダストドラゴン／バスターの効果発動。自身をリリースして効果を無効にして破壊する」

スタバが導き手を連れて消えて行く

「これで私の勝……」

「ありがとよスタバの効果を使ってくれて。これで心置きなくカードが使える」

俺の手には三枚のカード

「な……何故あなたの手にカードが!？」

「閃光の導き手は墓地でも効果を発揮する。このカードを墓地から除外してフィールド上のライトロードと名の付くカードの数だけカードをドロースる。ルミナスの効果発動!手札を一枚捨てシンクロモンスター以外のライトロードと名の付くモンスターを召喚する!現れる!チューナーモンスターライトロードダンサーリリーナ!」

『光り輝く踊り手よ今ここに!リリーナ!』

白く長い髪を後ろ後ろに束ねて白いベストに胸元だけを隠す服、白い長ズボン

「ポニテグッジョブ!」

おっとつい叫んでしまった

明日香とマリナ、ルミナスの目がすごく冷たい……

「……ライトロードダンサーリリーナの効果発動!一ターンに一度、

相手モンスターの表示形式を変更する！対象はニトロウオリアー！」

リリーナが踊りを踊るとニトロウオリアーが困惑して守備表示に変わる

ちなみに守備表示はGX準拠になっている

「LV4ライトロードマジシャンライラにLV2ライトロードダンサーリリーナをチューニング！閃光と共にあり世界を駆け抜ける騎士よ！勝利を我が元に！シンクロ召喚！駆けよ！ライトロードランサーゴードン！」

全身を白い甲冑に身を包み右手に突撃槍、左手に盾を持った騎士が現れる

ライトロードランサーゴードン

LV6 ATK2500 DEF1000 光属性 戦士族

シンクロノ効果

チューナー＋チューナー以外のライトロードと名の付くモンスター

このカードが守備表示モンスターを攻撃したとき、攻撃力が守備力を越えていた場合その数値分のダメージを相手ライフに与える。このカードが自分フィールドに表側表示で存在するとき自分のエンドフェイズ毎にデッキからカードを三枚墓地に送る

「墓地のクリッターとライトロードダンサーリリーナをゲームから除外してカオスソーサラーを特殊召喚！」

「……手札伏せカードが無くても墓地がある、か」

「そういうことだカオスソーサラーの効果、フルール・ド・シュヴアリエを除外する」

シュヴアリエがカオスソーサラーの生み出した闇に飲み込まれて消えて行く

「更にクラウドの効果、手札のライトロードと名の付くカードを捨てることで相手フィールドのカードを破壊する！閃光の剣群！」

伏せカードにいくつもの剣閃が降り注ぎ破壊される

「バトル！ゴードンでニトロウオリアーに攻撃！閃光疾走突！」

ゴードンはニトロウオーアを貫きそのままマリナまで突撃する

「ああっ！」

LP 4000 ↓ 3300

「クラウドで攻撃！煌めきの剣群！」

無数の剣閃がマリナを襲う

LP 3300 ↓ 300

「最後だ！ルミナスで攻撃！召閃波！」

『はああああ！』

ルミナスの両手から手から光がマリナに向けて放たれ直撃する

「ああああああ……！！！」

LP300↓0

ライフがゼロになりソリッドヴィジョンが辺りが静寂に包まれる

「ふう……危ない危ない……」

「すっげえな大五郎！シンクロ召喚とかシンクロモンスターとかとにかくすっげえ！」

「一応後で説明してやるよ。それより明日香、俺達が勝ったんだから帰ってもいいよな？」

「ええ、約束だもの構わないわ。ただし、明日シンクロについて詳しく教えてもらうわよ？」

「……私も聞きたいことがある。だから来なかったら……」

あれ？俺勝ったんだよな？なんか脅されてる感がかなりあるんだが

……

「「いいわよね……？」」

「はい！わかりましたOKです！」

「……なんか怖くないか明日香達」

「……これで怖くなかったら大物ツスよ」

くっ…… 人事だと思いやがって

人事ですので当然です

「お前ら帰りのボート漕げよ。俺は来る時漕いだからやんねーぞ」

「ははは……まあいいかこのぐらい」

「了解ツス……てかボクの場合立場的に強く言えないツス」

二人が何か言ってるが気にしない

気にしないっいたら気にしない！

「大五郎」

「ん？」

二人がボートを漕ぎはじめた時、マリナが話しかけてきた

「……私のポニーテー「グッジョブ！」ならいい」

マリナが自分のポニテを強調してきたので即グッジョブ

やっぱりポニーテールは正義だなうん

「……………（マリナ、あなたそんなキャラだったかしら）」

明日香は明日香で何か心配そうな表情でマリナを見ていた

マリナはドヤ顔でした

おまけ

『ポニテグッジョブなんて言って……私はどうせ束ねるほど長いんですよええなんです』

『……ルミナスどうしたの？』

『……妾は知らぬ』

『くっ……せめてジャスティスワールドにウィッグ等が売っていれば……』

『『いやそれはどうかと思う』』

『私は大五郎好みになれないのでしょうか……』

第三話『ポニーテールは正義ヒーハー!』(後書き)

これはひどい(ノ・。)

バスターモードの発動タイミングが明らかにおかしい

だが作者クオリティによりご都合主義展開

そしてオリカ……

これはひどい

もはやチートなんて目じゃない

相手無理ゲーに近い

閃光の障壁はやりすぎた感がある

だが後悔しない

なぜなら作者クオリティだから

第四話『恋の熱・究極のドロパン・十代は元気の三本でお送（ry）（前書き）』

今回はデュエル無しです

うん、それなりのできだ

第四話『恋の熱・究極のドロパン・十代は元気の三本でお送（ry）』

湖での一件の後に十代と翔にシンクロ召喚の説明をして適当にはぐらかしながらその日を終えた

朝になってPDAを見るとメールが入っていて、『朝食後に女子寮に来てほしい』と書いてあった

一寸待て

俺は誰だ？

俺は大和大五郎、普通の男だ

.....

「え？マジで？」

『随分と大胆な呼び出しね』

『男子禁制の場所によく呼べるのう』

『あは♪大五郎が困ってる困ってる♪』

「いやいやいや、普通戸惑うし困るがな」

てか何を考えてるんだあいつらは

「まあ成るようになるか」

俺はカードが入ったアタッシュケースを手に女子寮に向かう

「格の差を感じるな……」

女子寮に到着して寮を見上げて俺は思った

レッド寮ももう少しでかくてもよくね？

いや先にリフォームかな

そんなことを考えつつ俺は女子寮の入口に向かう

入口では明日香とマリナが迎えに来ていた

「お出迎えとは恐縮だな」

「女子寮に男子一人で入れる訳ないでしょう？事前申請と入ってから出るまでを監視しないとイケないの」

「大丈夫……すぐに慣れる」

「明日香、説明どうも。そしてマリナ、慣れるってどういう意味だ」

「ニヤリ」

「その邪悪な笑みはなんだ！？何を考えてる！？」

「ふふふ……さあ私の部屋に」

「……私の部屋に行くわよ。マリナの部屋は危険すぎるわ」

「残念……」

マリナは少し落ち込みながら寮に入って行く

明日香はため息を一つついてその後に行く

俺は一抹の不安を感じつつ女子寮に入る

明日香の部屋に行くまでに何人かの女子に睨まれたが明日香のおかげで止めてくれた

その変わりに羨望の眼差しを向けられたが……なんでだ？

しばらくして明日香の部屋に着いた

先に明日香が中に入り少し待たされる

中から入っていいと声をかけられたので俺とマリナは部屋に入る

「汚い所だけどうぞ」

「それは私の台詞よ！その前に汚くないわよ！」

「……お邪魔します」

マリナが余計な事を口にして明日香に怒鳴られるが飄々とスルー

俺は苦笑しながら部屋に入る

しばらく口論（一方的に明日香が怒鳴るだけだが）が続いたが、意味がないと判断した明日香はため息をつく

「はぁ……無駄な時間をとったわ」

「まあまあ、それより話を聞きたいんだろ？」

「ええそうよ。シンクロ召喚については昨日の内にマリナを締め上げて聞いたからそれ以外について聞きたいわ」

締め上げてって……

マリナに視線を向けると遠い目をしていた

「……………怖かった。般若も裸足で逃げ出」

「マリナ？」

「……………なんでもない」

明日香から黒いオーラがズゴゴゴといった感じに見える

正直直視しづらいですマジコワイデスアスカサン

「そ、それで他に聞きたい事って？」

とりあえず話題を逸らすべく話の続きにかかる

「そうね。まずは聞きたいのは何故あなたがシンクロ召喚システムについて知ってるのか、ね」

ふむその事が……ならば

「俺の保護責任者がペガサス・J・クロフォード会長でちよくちよくデュエルモンスターズについて話をする機会があつてその時に思いついたシンクロ召喚を話してみたらいい考えだと言われて採用されたんだ」

俺はあらかじめ用意してたシナリオを語ることでこの局面を乗り切ろうとした

保護責任者がペガサス会長と知れば、迂闊に深く聞こうとは思わないだろう

「……………そう、なるほどね」

ふふふ……聡明な明日香は気まずいと感じたとみた

これなら深い追求もないだろう

「ありがとう。後いくつか聞きたいのだけど……」

「ん、いいぞなんでも聞いてくれ」

「そう？じゃあ……」

俺はこの時完全に油断していた

「……何故マリナはシンクロ召喚システムが完成していたことを知らなかったの？」

……あ

「……………」

やっべえ……それについて考えてなかった……

そうだよく考えたら昨日の会話ちよつと不自然だよな

「シンクロ召喚システムが完成したのならモニターにも知らせるはずよね？まさかモニターじゃないのにシンクロモンスターを持つてるなんてありえないわよね？」

『なんでもいい！早くプリーズ！』

『それは……』

ルミナスが言う下策を聞いてみる

俺はそれを聞いて少し唸る

いや乗り切るところじゃないぞこの策……

だけど他に思い浮かばないし……

……仕方ない腹をくくるか

『ルミナス、外に声が洩れないようにしてくれ』

『わかりました』

ルミナスは何か呟くと淡い光が部屋を包みこむ

『これで大丈夫です』

『サンキュールミナス』

後はそうだな、マリナも巻き込むか

「マリナ、ちょっと耳を貸して」

「？わかった」

「あんなゴニョゴニョゴニョ……」

マリナはそれを聞いて目を見開く

しばらく俺を真剣な目で見つめるとふうと息をつく

「……わかった。なら私から最初に話す」

「……いいのか？」

「あなたが話すのに私だけと言うのも、ね」

「マリナ……」

「……それで話してくれるの？」

明日香が再度問いかける

「うん、まずは私から」

マリナは一度瞑目して改めて俺達に話し始める

「私は……この世界がアニメとして流されていた世界からの転生者」

「え……アニメ……転生者……？」

俺は何となく想像がついていたので黙って話を聞く

「私はその日買い物に出掛けてた。でも帰りに事故にあって死んだ」

「「……………」」

「気がついた時には五歳くらいの子供になっていた。私は混乱してしばらく茫然としていた時にテレビから流れてきた音で現実を理解した。流れたのは海馬コーポレーションのCM、私はそれで現状を把握できた」

転生したんだと……とマリナは言った

「しばらく部屋を物色していたら鍵のかかった箱を見つけると同時に両親が帰ってきた。両親の反応を見るに私は前世と同じで感情の起伏が小さいらしい」

「（昨日のあれを見るとそうは見えないんだが……………」」

「（あれで感情の起伏が小さいほうなのね……………」」

「父は私が持つてる箱を見て苦笑した。暗証番号がついてるけどわからないから開けられないんだと。もし開けたら中身をくれるって父は言ったわ。そして適当に数字を入れたら開いたの。その中身がこのデッキだったの」

マリナはデュエルディスクからデッキを抜き取りテーブルの上に置く

「前世で私が使ってたデッキだった。それを今の制限に合わせて改良した。シンクロモンスターもいたからシンクロできると思ってたけど……調べてもそんなルールは存在しなかった。だから今までシンクロ召喚なんてできなかった」

「だけど俺が教えた事でできると知った、か」

「そう。………明日香」

「何？」

マリナは躊躇いがちに明日香に問いかける

「私の話を聞いてもらったけど……その……友達でいてくれる？」

明日香はしおらしいマリナを見て驚いていたがすぐに柔らかい笑みを浮かべて手を握る

「私はそんな事気にしないわ。マリナはマリナじゃない。私の大切

な友達よ」

「明日香……うん、ありがとう」

二人が微笑みあっている姿を俺は空気を読んで黙ってみていた

しばらくして二人は俺が見ていることを思い出し、顔を赤くしながら俺に向き直る

「ん、ん……それじゃあ次はあなたの話を聞かせてもらっわよ?」

「ああ、構わんよ」

俺は今まで自分の身に起きた事をかい摘まんで話した

「……………まさかあなたまで違う世界の人間だったなんて」

「……………でも私とは違ってトリッパー」

「まあそういうことだ。他の人達には内緒だからな?」

「当たり前よ。こんなよた話誰が信じるのよ」

それもそうか、俺は用意された紅茶を飲んで一息つく

いやー明日香に本当のこと話して味方に引きずり込むなんてしたくはなかったけどまあ結果オーライとするかうん

「私としては企業秘密ではぐらかされるかと思っていたけど……」

「「あ……」」

俺達二人はそれを聞いて呆然とした

そして互いに目を交わした

そ・の・手・が・あ・っ・た・か！

「……あなた達どこか抜けてるわね」

「「うぐ……」」

「はあ……まあいいわ。勝手に共犯者みたいにされたんだから何か見返りくらいあるんでしょ？」

と流し目をしてくる

「まあな、と言ってもカードぐらいだな」

「充分よ。あなたから貰えると言うことは、見たことがないカードでしょうから」

明日香は優雅な動作で紅茶を飲む

まんまと利用されたな俺達……

「……明日香のくせに生意気な」

「ふふっ、マリナにはいつも口で負けてるからたまにはね」

俺はとりあえずアタッシユケースを開けてカードを見る

うゝむどのカードがいいだろうか……

「……そう、なら私にも秘策がある」

「秘策？」

「……『私もポニーテールにしたら喜んでくれるかしら？』」

「うほっ！ごほっ！な、なんでそれを……」

「『でもなんかバランスが悪いわね……いつそ切っちゃおうかな……』」

……『「

「マ、マリナ……お願いそれ以上は……」

「『はあ……さすがに明日には間に合わないわよね……』」

「お、お願いもう止めて……もう言わないから……」

「ふっ……私に口で勝とうなんて百年早い」

「……………うう、まさかあれが聞かれてたなんて……………」

何やら口論してるみたいだがなんで明日香はあんなに落ち込んでるんだ？

にしても明日香のポニーテールか…………

ふむ……………少し前髪を調整して……………縛り位置も少し上の方で……………

「グッジョブ!!」

おっとまた声が出てしまった

「な、何がグッジョブなの？」

「明日香のポニテ姿」

「え……………//」

「ちつ……想像させてしまったか……」

明日香は顔が赤くなりマリナは何故か舌打ちをする

何故にwhy?

「そつだ明日香、お前のデッキに合うカードを見つけたぞ」

「ど、どんなカード？」

俺が取り出したのは……

「Xセイバー？」

「ああ、これならアナペレラ、ヒュンレイといった女性型モンスターもいるし地属性戦士族モンスターがメインだからな。サイバーガールとも合わせられる」

それに荒野の女戦士を入れればXXセイバーフラムナイトがサーチできるしな

「ありがとう。でもいいの？シンクロモンスターって貴重なんじゃ……」

「明日香、俺とマリナのいた本来の世界ではカードは高くて一万円に届くかどうかだよ」

「そ、そんなに安い！？」

「ああ、それに青眼の白龍なんか大量にあるぜ？社長に話したら怒る怒る」

ははははと笑うが呆然としていた

まあ当然か

「ねえ」

「なんだマリナ」

「社長って……まさか海馬瀬人？」

マリナが恐る恐る問いかける

あれ？先の話に出てこなかったか？

「俺の携帯にはペガサス会長に海馬と遊戯さんの番号が入ってるんだなこれが」

二人はさすがに驚いたようで口をあんぐりとしていた

こらこらレディがはしたない

「ま、あんまり人に言わないようにな」

「言えるはずないでしょ……」

「絶対誰も信じない」

まあそうだよな

俺は二人の様子に特に気に止めずカードをアタッシュケースに詰めていく

その時ふと気になったことがあるのでマリナに話かける

「なあマリナ、デッキ見せてくれないか？」

「？別にいいよ」

マリナにサンキュと礼を言っ中を見る

ふむ普通にクイダンだな

まあダンディは出てこなかったけど

ん？なんだこのカードは？

「グランドスピリットシャオロン？」

見たことがないな……チューナーらしいが……うむ……

「私にも何故そのカードが入ってるのかはわからない。ただ……」

「ただ？」

「……このカードは私の象徴だと思うの。不動遊星にとってのスターダストドラゴンのように、いつか出会おうと思うの。この子が成長した姿に」

マリナはグランドスピリットシャオロンのカードを眺めながら微笑んだ

俺は不覚にも見とれていた

「……そんなに見てもこのカードはあげない」

「いや欲しいとは言っていないって」

「この子は欲しがる程の価値が無いとでも言うの!?!」

「逆ギレ!?!」

まさかの逆ギレに俺は戸惑う

あれ？感情バリバリ出てね？

「どうどう……明日香すまんがトイレどこだ？」

「トイレは入口近くのドアよ」

「サンキュー」

俺は素早く席を立ちトイレに逃げ込む

くわばらくわばら

Side～マリナ～

大五郎がトイレに逃げ込んだため、私は深呼吸をして気を落ち着かせる

昨日、大五郎を見かけてから私はおかしい

普段ならチューナーが来ても何も思わないし感じないのに昨日は何故か疑問に思ってた

彼がシンクロ召喚ができることを教えてくれた時も、嬉しさを感じた

デュエルをしていたら楽しさを感じた

デュエルをあんなに楽しいと感じたのは久しぶりだろう

そして負けた時も……悔しさを感じた

初めてだった

あんなに感情が揺れ動き、心が熱くなったのは

彼と……大五郎といると私がわからなくなる

さっきだって何故怒鳴ったのかわからない

大五郎にポニテを褒められた時は？

嬉しかった

大五郎が私みたいに違う世界の人間だと知った時は？

寂しさが消えた

明日香がポニテールにしようか悩んでるのを見かけた時は？

胸が少し苦しかった

わからない

わからない

わからない………

この思いは何なの？

ずっとそばにいたいと思うこの心の熱は……

「……マリナ」

明日香が私を呼ぶ声が聞こえた

「何？」

明日香の方を向くと明日香はニコニコしていた

なんで？

「マリナ、あなた生き生きしてるわよ」

生き生き……？

私が……？

「彼のおかげかしらね。昨日大五郎と出会ってからあなたの笑顔をよく見るもの」

私は手を口にもってくる

あ……笑ってる……

「あなたの心の氷を溶かしたようね。大五郎という火は」

そっか……溶かされたんだ……私の氷……心を……

ああ……これが恋をするってことなのかな？

……
だとしたら前世含めて初めての……本当の初恋を大五郎にしたんだ

うふふ……

大五郎、絶対逃がさないよ

S i d e ～ マリナ ～ O u t

なんだろう……俺のいないところで何かが進んでる気がする

だが今はトイレに集中しよう

S i d e ～ 明日香 ～

昨日から起きてるマリナの変化に私は戸惑う反面嬉しさを感じていた

中等部の頃からずっと人形みたいに表情が変化しないから心配だっ

たけど、もう必要ないみたい

マリナは間違いなく彼に恋をしているわ

私は……どうなんだろう？

彼が私のポニーテール姿を想像して褒めてくれたのは嬉しかったし、ポニーテールが私に似合うか試したりもしたわ

……見られてとは思わなかったけど

私は仲のいい男子といえば亮ぐらいしかいないし、亮は友人としか見てないし見れない

その点彼はどうなんだろうか？

亮は異性として見るには近くに長く居すぎたのかも知れないわ

逆に彼はまだ出会ったばかりだしまだ知り合いから友人といった仲でしかない

でも正直彼に惹かれてる自分がいるのも確か

だったらあとは自分の心を見極めるだけよ

私が彼に恋をしているのか否かを

……それに勝手に特殊な事情に巻き込まれたしね

S i d e 〱 明日香 〱 O u t

またなんか進んでないか？

なんかフラグ的な何かが建った気がする

あるとすれば女子に恨まれて後ろからグサッ！とかか？

うゝんなんか違う気がするがまあいいや

はあスッキリした

俺はトイレから出て二人のいるテーブルに向かう

………なんだろうこの空気は？

形容しがたい何かを感じる

とりあえず何か会話でもしないといけない気がする

「そっぴや腹減ったな」

「確かにもうお昼ね」

「……ドローパン食べたくなってきた」

ドローパンか……いいな

「じゃあ購買まで足を伸ばしに行こうか」

二人もそれに同意する

簡単にテーブルの上を片付けて女子寮を後にする

アカデミア・購買

「おばちゃん、ドロパン三つね」

俺は購買に到着してすぐ、購買のおばちゃん……トメさんにドロパンの代金を渡す

「はい毎度、今日はまだ誰も買っていないから卵パンが当たるかも知れないよ」

「ホントに？じゃあ当てにいかなきゃデュエリストじゃねえな」

俺は明日香とマリナに視線を向ける

「そうね、黄金の卵パンは譲れないわね」

「卵パンは私がいただく」

「んじゃ……」

俺達は横に並び手を構える

「」「ドロー……！」「」

三人同時に手を突っ込みドローパンを掴みとる

「まずは私から行くわ」

明日香が袋を開けて一口食べる

「ん……イチゴシャーベットね」

「次は私、あむ……具無しパン」

マリナは具無しのカード入りを引き当てた

「カードは……！？シンクロ関連カード！？」

「はぁ！？」

「え！？」

俺と明日香はマリナの手のカードに目を向ける

「波動再生、波動障壁、重力崩壊、シンクロストライカーユニット、シンクロキャンセル……」

「確かにシンクロ関連のカードばっかだな……」

「どうして？いくらなんでも早過ぎじゃあ……」

三人であーだこーだ言ってみたが答えが出ないのでとりあえず保留にした

「じゃあ最後は俺のパンだな。何が出るかなあむ」

俺は一口かぶりつく

こ、これは……………！？

「……………」

「大五郎？」

「……………何この臭い」

俺は口の中身をどうにか飲み込みパンを見る

「バ、バナ納豆パン……………まさか……………幻の……………パンに……………当たるとは……………」

「バナ納豆パン!？」

「濃縮還元200%の幻のパン……!？」

俺はパンを素早く袋に入れて口を閉じる

「おお……なんて破壊力……腹が……」

あまりに濃縮された空気に俺の胃の中で謎の発酵現象が起こってやばいことになってる

「トメさん胃薬ない!？」

「これを使いな!」

明日香がトメさんから胃薬を貰いマリナは水を買ってきてくれた

俺は近くのベンチに寝かされ口に薬と水を流し込まれる

「んぐ……んぐ……かつは……ああゝなんとか助かった……」

「ついてないねえ、バナ納豆パンはあまりの不味さにもう販売してない奴だよ。たまたま残ってた奴を引いてしまうなんて運がいいのか悪いのか……」

「たまたま残ってたって……」

「業者にクレーム入れないと……」

マリナクレームはいいから

「まあ特別にもう一個ドローパン持っていきな。さすがにこれ以上悪いパンはないはずだよ」

「ありがとつメさん……とりあえずドロー」

俺はローテンションでドローパンを手にする

うゝんまだムカムカする……

「あむ……具無しパン……」

「口直しにもならないわね……」

「後で普通のパンを買うことを推奨する」

「そうするわ……カードは……」

俺はパックを取り出しカードを見る

「……………ええ……………ないわぁ」

俺は明日香とマリナにカードを見せる

「ツルプルン、ヤランゾ、くいぐるみ……」

「レアリティは高いけど、ね」

「テンションが……すまん部屋に帰って休むわ」

明日香とマリナもこれに同意しレッド寮近くまで送ってもらった

「んじゃまた明日」

「ええ、また明日」

「また明日」

二人に別れを告げて俺は部屋に入り布団に入る

やっと一息……

ボタン！

「お！帰ってきた帰ってきた！大五郎！デュエルしようぜ！」

……休ませてくれよ十代

はぁ……元気な奴だ

第五話『月一試験、そして始まりの召喚前半』（前書き）

一ヶ月以上かかったやいました

地震にもあってびっくりですけどね

さて今回ブリザードプリンセスとライティーに名前が付きました

名前は本編にて確認ください

第五話『月一試験、そして始まりの召喚前半』

バナ納豆パン事件より数日が経った今日

アカデミア恒例月一テストがある日になった

「……………」

準備をすませ軽い復習も終えてあとは出発するだけなのだが…………

「ZZZ……俺のターン……」

この寝ぼ助をどうにかしなければならぬ

別に置いて行ってもいいんだが、生来の性格から放っておけない質なので起こすことにした

「十代、起きろ。もう8時になるぞ」

ちなみに試験開始は8時40分、朝礼に至っては8時30分にある

「んがぁ……俺は融合を……」

「……仕方ないな」

俺は食堂から借りてきたフライパンとお玉を取り出し構える

「秘技！死者の目覚め！」

ガンガンガンガン！！！！

俺は十代の側で力の限りフライパンをお玉で叩く

「うわぁ！？なんだ！？」

「おはよう十代、時刻は8時を迎えています」

俺は丁寧な言葉遣いで十代に現状を教える

「げっ！？マジかよ！急いで準備するから外で待っていてくれ！！」

「そうさせてもらつよ」

俺は慌てる十代に背を向けて外に出る

5分程経つた頃に十代が部屋から出てくる

「ほら、飯食つてないと辛いだろ」

「お！おにぎりかサンキュー大五郎！」

俺は十代にあらかじめ作っておいたおにぎりを渡す

十代はすぐにかぶりつきあつという間に食べてしまった

「いやぁ助かつたぜ」

「それは何より、さて急ぐぞ」

「おうー！」

あまり時間が残ってないため俺と十代は走ってアカデミアに向かう

さすがにレッド寮とアカデミアの距離を考えると結構辛いな

後少しというところで、坂の途中でトラックが止まっていた

ああ、そういえばこんなイベントあったな

「トメさんどうしたの!？」

俺はトメさんに話し掛ける

十代も気になるのか一緒に来てくれている

「ああ大五郎ちゃん、実はトラックが故障したみたいで動かなくなっちゃったのよ」

「マジかよ!?!トメさん俺も手伝うぜ!」

「俺も手伝う。三人いればこんな坂すぐに押し切れるさ」

「ありがとう二人とも。でもいいのかい？今日は試験なんですよ」

「困ってる人を放っておけない質なんでね」

「俺も俺も！それにまだ15分もあるから大丈夫だつて！」

トメさんは俺達を心配してくれたが俺達が意地でも手伝ってくれると知ると感謝の言葉を告げて再びトラックを押す作業に戻る

俺達もトメさんと一緒にトラックを押す

そしてやっとアカデミアの前までトラックを押してくることができた

「ありがとね二人とも」

「いって俺達が好きでやったんだから」

「ええそうですよ。っと十代、もう30分を過ぎた。遅刻だが試験には間に合うぞ」

「ってそうだった。じゃあなトメさん！」

「あいよ。今度購買に来たらサービスしてあげるよ！」

トメさんの言葉を背中越しに聞きながら俺達は試験のある教室に急ぐ

遅刻はしたが一応試験前にたどり着くことができた

俺達が試験用紙を手に席に座るとチャイムがなり試験が始まる

さて、どんな問題があるだろうか……

『問一、シンクロ召喚が新たに追加されたことによって変化した用語を答えよ』

変化した用語？

ああ、生贄がリリースで生贄召喚がアドバンス召喚になったんだっ

たな

あとは融合デッキがエクストラデッキか

『問二、特殊勝利条件を全て挙げよ』

終焉のカウントダウンにエクゾディアにウィジャ盤つと

『問三、シンクロモンスターの召喚に必要な新たなカテゴリースターを答えよ』

チューナーモンスターつと

『問四、アンティークギア古代機械のモンスターを全て挙げるノーネ』

あんたは試験に何をやっとするんじやい

完全に自分の満足問題じゃねえか

まあ答えれるかな

そんな感じで時間が過ぎていき筆記試験は終わり、昼休みになると同時に多くの生徒が購買に走っていく

「なんでみんなあんなに急いでるんだ？」

「今日は新しいパックの発売だからな。実技試験の前にデッキを強化しようとしているのさ」

俺が独り言を呟くとそれに答えるようにライイエローの男子が話す

「なるほどな。で、あんた誰？」

「おっとすまない、俺は三沢大地、見ての通りライイエローだ」

「俺は大和大五郎、今はオシリスレッドだ」

ライイエローの男子……三沢と自己紹介をする

そついやいたつけこんな奴

「三沢は買いに行かないのか？」

「俺は今日のために綿密にデッキ調整したからな。下手にカードを入れてバランスを崩したくないからな」

「なるほどな、じゃあ俺は十代を起こして行ってみるかな。運がよけりゃ一パックは残ってるかも知れないし」

俺は三沢と別れて十代を起こして購買に向かう

購買に着いたら人がうじゃうじゃいるものだと思っていたがほとんど人はいなかった

「あれ？今日は新しいパック発売のはずだよな？」

十代も気付いたのか疑問を口にする

すると購買からトメさんが出てくる

トメさんの話によると謎の学生が買っていたとのことだ

謎の学生……うーん……GXは初期の方が思い出しにくいんだよな

まあ予想するなら変装したクロノス教頭だよな

俺が思考に耽っている間にトメさんはあらかじめとってあったカードパックを十代に渡していた

いいな〜と思ってたらトメさんは俺にも渡してくれた

十代のとは違うカードパックを

「それは今日カードを仕入れてた時に渡されたのさ。大五郎という少年に渡してくれた。私を知る中で大五郎は大五郎ちゃんしか知らないから多分これは大五郎ちゃんのだと思うよ」

俺はトメさんからカードパックを受け取る

中を見ると俺が見たこともないカードが入っていた

そして一枚だけデュエルモンスターのカードじゃなく、メッセージカードが入っていた

『これは私からのプレゼントデース。ボーイの運命に苦難がないことを祈ってマースb y ペガサス』

会長……………ありがとうございます

俺は空いてるホルダーにカードを入れて懷にしまっ

そうだ、今日はシンクロ主体のデッキでいこう

ぶんぶん回すぜ！

俺と十代はトメさんに礼をいって試験会場のデュエルフィールドに急いだ

会場に着いた時にはまだ始まってなかったためギリギリ間に合ったみたいだ

レッド生がいる辺りに行くと翔が気付いて手を振りながら近づいてくる

「二人ともヒドイッス！筆記試験が終わった途端になくなるんすから」

「わりいわりい。大五郎に新しいパックのこと聞いて購買まで急いでたから」

「まあそれ以前に夜遅くまで復習して睡眠時間を削って結局寝た奴が何を言うか」

図星を指された翔は床にのの字を書いて落ち込む

十代はそれをまあまあと宥める

そんな感じで三人で過ごしていると十代が呼ばれてステージにあがる

相手は万丈目でどう考えても作為を感じる組み合わせだったが

「万丈目！お互い手札は0！フィールドにカードも無い！
残りのライフも10000ポイント！

此処で俺が攻撃力1000以上のモンスターを引いたら面白いよな
あつー！！」

「何を馬鹿な事を！そう簡単に引ける訳無い！！」

「でも引いたら面白いよな！」

いや

「引くに決まってるだろ」

「うん、アニキに限ってここで外すのはありえないッス」

俺と翔は二人してうんうんと頷く

俺達が予見した通り、十代はフェザーマンをドローして勝利した

十代がステージを降りてこっちに来たと同時にアナウンスが流れ俺が呼ばれる

『次は！シニョール大和と、シニョール天上院とシニョール神宮司の変則タッグデュエルノーネ！』

なん……だと……？

俺はアナウンスを聞き終わると同時にステージを見る

そこには明日香とマリナが俺を見ながら待っていた

………おもしろい！

俺を満足させてくれよ！！

俺は明日香達の向かいに立つとディスクを構える

『ルールは、ライフポイントはシニョール大和が8000、シニョール達が各4000ノーネ。先攻はシニョール大和からで順にシニョール天上院、シニョール神宮司となるノーネ』

「待った。ライフポイントは俺も4000で十分だ」

俺がそう宣言すると向かいの二人からのプレッシャーが上がり、会場からざわめきがおこる

「ナメられたものね。私達二人を相手に通常のライフで挑むなんて……!」

「さすがにイラッと来た。絶対潰す」

二人から怒りのオーラが発せられる

「さあいくぜ!」

「デュエル!」

Daigoro LP4000

VS

Asuka & Marina LP4000/4000

「俺のターンンドロー！俺はモンスターをセットしてカードを三枚伏せてターンエンド！」

「私のターンンドロー！私は手札から魔法カード融合を発動！手札のエトワールサイバーとブレードスケーターを融合！サイバーブレードを融合召喚！」

流石に早いな……！

ちと怒らせすぎたか？

「カードを二枚伏せてターンエンド！」

「私のターンンドロー」

こっちは静かだがなにやら重圧がひどい

「手札から魔法カードワンフォーワンを発動。手札からモンスターを墓地に送ってデッキからターボシンクロンを特殊召喚。更に墓地のダンディライオンの効果発動、このカードが墓地に置かれた時綿毛トークンを二体特殊召喚する」

あれ？なんか嫌な予感が……

「私はデブリドラゴンを召喚、効果を発動して墓地のダンディライオンの効果を無効にして特殊召喚。ＬＶ１綿毛トークンにＬＶ１ターボシンクロンをチューニング！集いし願いが新たな速度の地平へ誘う、光差す道となれ！シンクロ召喚！希望の力！シンクロチューナー、フォーミュラシンクロン！そしてＬＶ１綿毛トークン、ＬＶ３ダンディライオンにＬＶ４デブリドラゴンをチューニング！集いし願いが新たに輝く星となる、光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！スターダストドラゴン！」

マリナのフィールドにスターダストドラゴン、フォーミュラシンクロンとトークン二体が揃う

何故あいつは遊星並の速さでアクセルシンクロができる環境を作れるんだろうか？

「……………」

そして静かに目を閉じるマリナ

しばらくしてカッと目を開く

「見えた！水の一滴！」

それは明鏡止水の境地です

（まあ教えられた限りでは変わらんがな……）

「LV8スターダストドラゴンにLV2シンクロチューナーフォーミュラシンクロンをチューニング！集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く！光差す道となれ！アクセルシンクロ！招来せよ！シューティングスタードラゴン！」

こいつは……やばい！

「予想以上に怒らせてしまったようだ……」

「イラッと来た。かつてないほど熱く燃え上がる程に、ええ純粋な怒りが理性を従える程にね……！」

マリナからのプレッシャーが更にあがる

ここ遊戯王の世界だね？

間違ってもリアルバトルの世界ではないはず

「私のターンからバトルが可能！シューティングスタードラゴンの効果発動！一ターンに一度、デッキの上から五枚めくってその中のチューナーモンスターの数だけ攻撃できる！」

マリナはデッキに手をかけて一気に五枚引く

「すいませんが一枚ずつめくってください」

まあいいか遊戯王の世界でルール違反なんてざらにあるし

「チューナーモンスターの数は……ジャンクシンクロン、ハイパーシンクロン、クイックシンクロンの計三枚！よって三回攻撃可能！バトル！シューティングスタードラゴンで攻撃！スターダストミラーシュー！」

シューティングスタードラゴンが分身を出して三体になって攻撃してくる

だが甘いな

「畏発動！インフェルニティインフェルノ！手札を二枚まで捨てる
ことができ、捨てた枚数分デッキからインフェルニティと名の付く
モンスターを墓地に送る！」

俺は手札のヘルウェイパトロール二枚を墓地に送ってデッキからイ
ンフェルニティデーモンとインフェルニティネクロマンサーを墓地
に送る

「インフェルニティ！？じゃあそのリバーズモンスターは……」

「お察しの通りインフェルニティガーディアンだ！」

黒い盾に燃え盛る髑髏がついたモンスターがシューティングスター
ドラゴンの攻撃を弾く

「マリナのシューティングスタードラゴンの攻撃を弾いた！？」

「……インフェルニティガーディアンは手札がゼロ枚の時、戦闘及
び効果で破壊されない」

「そういうことだ、手札がない時に効果を発揮するモンスター、そ

れがインフェルニティ！これがハンドレスコンボだ！」

「バトルは中止、カードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターンドロー！」

俺はドローしたカードを見る

よし！来た！

「俺がドローしたのはインフェルニティデーモン！インフェルニティデーモンは手札がゼロの時にドローした場合相手に見せることで特殊召喚できる！現れるインフェルニティデーモン！」

インフェルニティガーディアンの隣に羊の頭のような悪魔、インフェルニティデーモンが現れる

「手札がゼロの時にインフェルニティデーモンの特殊召喚に成功した時、デッキからインフェルニティと名の付くカードを手札に加える！加えるカードはインフェルニティリベンジャーだ！そしてリバーカードオープンワンフォーワン！手札のインフェルニティリベンジャーを墓地に送りインフェルニティミラージュを特殊召喚！」

フィールドに赤い葉っぱのような髪に青いローブを着たモンスター、インフェルニティミラージュが召喚される

「インフェルニティミラージュの効果発動！手札がゼロの時、このカードをリリースすることで墓地からインフェルニティと名の付くモンスターを二体特殊召喚できる！蘇れ！インフェルニティネクロマンサー！インフェルニティリベンジャー！そしてインフェルニティネクロマンサーの効果発動！ターンに一度、手札がゼロの時、墓地からインフェルニティと名の付くモンスターを特殊召喚できる！更に蘇れインフェルニティデーモン！インフェルニティデーモンの効果で俺はデッキからインフェルニティガンを手札に加える！そして永続魔法インフェルニティガンを発動！」

これで舞台は整った

そっちがクリアマインドならこっちはバーニングソウルだ！

Side〜マリナ〜

デュエルが始まる時、大五郎の台詞はかなりイラッと来た

それはもうかつてないほどに

だから手札を見た時にシューティングスターが直ぐに出せる事に気付いた時には笑いをこらえるのに苦労した

明日香も順調な立ち上がりをしたし私もシューティングスタードラゴンを召喚出来た

そして効果を使った時、チューナーを三体引けた

これで勝ったと思った

あの罠が発動されるまでは

インフェルニティ……満足野郎が使ったモンスター……

デュエルは手札の数だけ希望があると言われる

それを真っ向から否定するモンスター、インフェルニティ

今も大五郎のフィールドにはインフェルニティのモンスターで全て埋まっている

そしてリベンジャーはチューナー……もしインフェルニティのモンスターだけならインフェルニティデスドラゴンが出てくるだろう

しかし……

「絶対違う」

「マリナ？」

シューティングスタードラゴンには破壊効果を無効にする効果がある

破壊が駄目なら除外、またはバウンスやコントロール奪取しかない

あのフィールドじゃあブリューナクはでない

なら出てくるのは……

「トリシューラか……」

「マリナ？さっきからどうしたの？」

ああもう

「明日香つるさい黙れ」

「タッグパートナーに対して酷い言いようね！？」

「パートナー？はっ、主と下僕の間違いでしょ」

「あなたって娘は……」

明日香がなんか落ち込んでるけど無視

今は大五郎の展開に警戒を集中する

次はどうくるのかな？ワクワクする

……今思えば私はデュエル馬鹿なのかも知れない

S i d e ～ マ リ ナ ～ O u t

なんか前方からすごい会話が聞こえてきたがこの場はスルーするの
が礼儀だろう

さて目にもの見せようぞ！

「LV4インフェルニティデーモン、LV3インフェルニティネクロマンサーにLV1インフェルニティリベンジャーをチューニング！王者の鼓動今ここに烈をなす、天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、レッドデーモンズドラゴン！」

俺のフィールドに現れるは絶対王者の紅蓮魔龍

果てしなき力を見せてやろう！

「インフェルニティガンの効果発動！手札がゼロの時、このカードを墓地に送ることで墓地からインフェルニティと名の付くモンスターを二体まで特殊召喚できる！来い！インフェルニティリベンジャー！インフェルニティネクロマンサー！そしてLV4インフェルニティデーモンにLV1インフェルニティリベンジャーをチューニング！リミッター解放レベル5！レギュレーターオープン！スラスタ！ウォームアップOK！アップリンクオールクリア！GOシンクロ召喚！カモン！TGハイパーライブラリアン！」

電子書籍らしきものを持った白いローブの男が現れる

「TG……！？インフェルニティで何故！？」

「マリナ！あのモンスターを知ってるの！？」

「あいつがフィールド上に存在する時、シンクロ召喚する度にコン
トローラーはカードを一枚ドロースる」

「え！？じゃ、じゃあインフェルニティとは相性が……」

ふふふ……混乱してるな

普通にインフェルニティを知ったばかりならば勘違いするだろうな

たしかに手札をつねにゼロにしなければインフェルニティモンスター
は効果を発揮しない

だが魔法・罫の中には手札を切らなければならないものも多々ある
のだよ

「インフェルニティネクロマンサーの効果発動！インフェルニティ
リベンジャーを特殊召喚！LV4インフェルニティガーディアン、
LV3インフェルニティネクロマンサーにLV1インフェルニティ
リベンジャーをチューニング！地獄と煉獄がゼロへと鎖す時、無限
の定めより死神は蘇る！シンクロ召喚！その目に映るのは生か死か。
いでよ！ワンハンドレッドアイドラゴン！」

百の目を持つ漆黒の龍が闇より現れる

んーフィールドだけ見れば俺完全に悪者だな

「ハイパーライブラリアンの効果でドロ。ふ……来たか俺はインフェルニティビートルを通常召喚！そしてインフェルニティビートルの効果を発動！手札がゼロの時、このカードをリリースすることでデッキから同名カードを二枚まで特殊召喚できる」

インフェルニティビートルが白く光る

光りは二つに別れ、再びインフェルニティビートルの形をとる

「マリナ！そちらがクリアマインドなら……」

俺は右手を握って拳を作り、胸にドンと叩きつける

「バーニングソウルだ！」

俺の右腕が赤く輝き体に力が溢れてくる

「LV8レッドデーモンズドラゴンにLV2インフェルニティビートル二体をダブルチューニング！」

「ダブルチューニング！？アクセルシンクロとはまた別のシンクロ召喚！？」

「まさか……そんな……」

「王者と悪魔、今ここに交わる！荒ぶる魂よ！天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚！いでよ！スカーレッドノヴァドラゴン！」

灼熱の炎の中から深紅のドラゴンが姿を現す

「ハイパーライブラリアンの効果でドロー！スカーレッドノヴァドラゴンの攻撃力は、墓地のチューナーの数×500ポイントアップする！墓地には四体のチューナーがいる、よって攻撃力は2000アップ！」

ATK3500↓ATK5500

「攻撃力5500！？」

「シューティングスタードラゴンを越えた……」

まだだ！まだ俺のメインフェイズは終了してないぜ！

「俺は墓地のヘルウェイパトロールの効果を発動！このカードを除外することで手札の攻撃力2000以下の悪魔族モンスターを特殊召喚する！インフェルニティミラージユを特殊召喚！インフェルニティミラージユの効果を使いインフェルニティビートルとインフェルニティデーモンを特殊召喚！インフェルニティデーモンの効果でインフェルニティブレイクを手札に加える。LV4インフェルニティデーモンにLV2インフェルニティビートルをチューニング！紅蓮の炎を纏いし戦士よ、侵略者達に灼熱の裁きを与えよ！シンクロ召喚！焼き尽くせ！フレムベルウルキサス！」

ライブラリアン効果でドロート

俺のフィールドに四体のシンクロモンスターが並ぶ

その光景に明日香とマリナは愕然としている

まあ容赦はしませんがね

「バトルだ！スカーレットノヴァドラゴンでシューティングスター

ドラゴンに攻撃！バーニングソウル！」

炎に包まれたスカーレットノヴァドラゴンがシューティングスタードラゴンに向かって行く

「シューティングスタードラゴンの効果！このカードを除外するこ
とで一度だけバトルを無効にする！」

しかし寸前でシューティングスタードラゴンの姿が掻き消え、攻撃
は空振りに終わる

「なら次だ！ワンハンドレッドアイドドラゴンでトークンに攻撃！イ
ンフィニティサイトストリーム！」

ワンハンドレッドアイドドラゴンの攻撃でトークンが一体消える

「次だ！フレムベルウルキサスで攻撃！フレアナツコオ！」

ウルキサスがトークンを殴りトークンを燃やし砕く

砕けた燃える破片がマリナを襲う

「ああっ……!?!」

LP 4000 ↓ 1900

ウルキサスの貫通攻撃で擬似ダイレクトアタックが決まる

そしてダメージが通ったためウルキサスの攻撃力があがる

ATK 2100 ↓ 2400

「止めだ! TG ハイパーライブラリアンでダイレクトアタック!」

「手札の速攻のかかしを捨ててバトルを強制終了する!」

止められたか……

「カードを二枚伏せてターンエンド」

エンドフェイズにシューティングスタードラゴンがフィールドに戻ってくる

まあリバースカードにさえ気をつけていけば問題ないだろうな

このデュエル、これだけやったんだからそうそう負けられんよ

「私のターンドロー！私は強欲な壺を発動！カードを二枚ドロー！」

明日香も少ない手札を補充してくる

だが明日香はシンクロ召喚には触れたばかりだ

そうそうやられんよ

S i d e 〳 明日香〳

状況は絶望的……

私のフィールドと手札に場を逆転することのできるカードはない

だけど、なんとなくわかることがある

絶対にただじゃ終わらない

必ず一泡吹かせることができる

それだけは漠然とわかる

なら、私がすべきことはただ一つ

徹底的にマリナをサポートすること

シンクロをまともに使えない私よりマリナに全てを託したほうがいいはず

でも、ただやられるわけにはいかないわよ！

「サイバーチュチュを召喚！」

ライフを4000にしたのを悔いるがいいわ！

「バトル！サイバーチュチュで攻撃！サイバーチュチュは相手フィールド上にこのカードの攻撃力以上のモンスターしかいない場合ダイレクトアタックをすることができる！」

「ぐっ……！？」

LP4000↓3000

「カードを一枚伏せてターンエンド」

後は任せたわよマリナ

S i d e 〱 明日香 〱 O u t

S i d e 〱 マリナ 〱

どうする……明日香はうまくダイレクトアタックを決めた

それに伏せが三枚だから反撃の手を持っているはず

どうする……私にできることはあるの？

「私のターンドロー」

今のフィールドじゃあスカノヴァは倒せない……

どうする……

「マリナ！」

明日香……？

「あなたらしくないわね、いつものように大胆不敵にやりなさいよ」

いつもの……そうだ

いつものようにデュエルすればいいんだ

怯える必要はない

デュエルは単体ハイパワーのモンスターでのゴリ押しだけじゃないんだから

スカノヴァは破壊耐性を持つてるけど、それ以外ならいける

「私は手札から天よりの宝札を発動。全てのプレイヤーは手札が六枚になるようにドロースる」

これでインフェルニティブレイクを一時的に封じた

あれは手札がゼロの時しか発動できないからしばらくは安全

そして私の手札は…………

「私は手札からレベルステイラーを墓地に送ってクイックシンクロンを特殊召喚！墓地のレベルステイラーの効果発動！シューティングスタードラゴンのレベルを一つ下げてレベルステイラーを特殊召喚！」

シューティングスタードラゴンのカードの星からレベルステイラーが現れる

てんとう虫になんて召喚エフェクトを使うんだか

「LV1のレベルステイラーにLV5のクイックシンクロンをチューニング！集いし力が大地を貫く槍となる！光り差す道となれ！シンクロ召喚！砕け、ドリルウォリアー！」

「ハイパーライブラリアンの効果で俺はドローする」

大五郎の手札は増えたが今は関係ない

ただ突き進むのみ！

「私はジャンクシンクロンを通常召喚！効果によりレベルステイラーを特殊召喚！そして魔法発動！」

これが決まればスカーレットノヴァドラゴンを排除できる

「精神操作！」

「精神操作！？まさか対象は……」

「対象はハイパーライブラリアン！」

大五郎のフィールドにいるライブラリアンが私のフィールドに移る

これで準備は整った

「LV5TGハイパーライブラリアン、LV1レベルステイラーにLV3ジャンクシンクロンをチューニング！絶対零度の世界の王者、氷炎纏いて世界を砕け！シンクロ……！！？」

エクストラデッキからカードを取りだそうとした瞬間、指先が少しだけ凍っていく感覚を覚えて動きを止める

「これは……!？」

感じた感覚通りに指先は凍っていた

まるで召喚を拒むかのように

（私にはあなたが使えないとも言いたいの!）

少しずつ凍りつく範囲が広がり手首まで侵食している

（私は……私は負けたくない!だから力を貸しなさい!）

私は強引にカードを掴み出す

その瞬間、凄まじい勢いで体が凍り始める

（確かに大五郎は特訓して力を制御している。私はただの感覚でしかやってない……けど！）

徐々に動きが制限される中、カードを掴んだ手は少しずつディスクに向かう

（勝利への渴望は負けてない！）

確かに私には大五郎みたいに使命や力はない

でも大五郎も私もデュエリスト

そこには隔てるものは何もない！

（だから……あなたが拒もうと私は強引に引きずりだしてやる！）

ギャオオオオオン！！

雄叫びが聞こえると同時に私の動きを阻害していた氷は砕けた

「シンクロ召喚！凍てつかせよ！氷結界の龍トリシューラ！」

そして私はトリシューラを召喚した

この時は思いもしなかった

この出来事が精霊界で多大な事件を巻き起こす事になるうとは

S i d e 〽 マリナ 〽 O u t

マリナがシンクロ召喚を行う途中一瞬動きが止まった

が、すぐに動きだした

召喚するのを間違えたか？

『あ……あれは……』

『馬鹿な！あの小娘が召喚したというのか！？』

『あわわわ！まずい！まずいよ！？』

（どうしたみんな！？何を慌てているんだ！？）

『そ、それは……』

「シンクロ召喚！凍てつかせよ！氷結界の龍トリシューラ！」

ルミナス達はマリナが召喚しようとしたトリシューラに何やら慌てていたので理由を聞こうとしたらマリナのフィールドにトリシューラが現れた

『あ……ああ……』

『い、いかん！妾は先に戻るぞ！』

『こうしちゃいられないよ！？私もみんなの所に戻らなきゃ！？』

ブリザードプリンセスのリーザとフォーチュンレディライティーのレイラは慌ただしく精霊界に帰っていく（何気に名前初出し）

『大五郎、私も一度ジャスティスワールドに戻ります。理由は今夜戻りますのでその時に』

ルミナスも慌ただしくまくし立てて精霊界に戻る

「……理由はわからんが、あのトリシューラはやばいと言うことだな。色んな意味で」

俺は背中に冷や汗を感じながらトリシューラと対峙する

氷結界の龍トリシューラ

このモンスターが事件の始まりのモンスターだった

後半に続く

第五話『月一試験、そして始まりの召喚前半』（後書き）

マスターガイドよんだらターミナルワールドは一度トリシューラで滅んだらしいです

だからトリシューラから始めてみようかなと思います

あとデュエル内容について言いたいことたくさんあると思いますが作者の満足なので生暖かい目で見逃してください

第六話『月一試験、そして始まりの召喚後半』（前書き）

三ヶ月ぶりの投稿

べ、別にサボってたわけではないんだからね！！

……………似合わないな

第六話『月一試験、そして始まりの召喚後半』

ルミナス達は精霊界に帰っていった

あのトリシューラと何か関係があるのだろうか

「トリシューラがシンクロ召喚に成功した時、相手のフィールド、手札、墓地からカードを一枚ずつゲームから除外する！」

マリナが対象に選んだのはフィールドからはスカーレットノヴァドラゴン、墓地からはインフェルニティデーモン、手札はランダムに選ばれ強欲で謙虚な壺が凍りつき砕ける

俺のフィールドにはウルキサスとワンハンドレッドアイドラゴンに二枚の伏せカード

対するマリナはシューティングスタードラゴン、トリシューラ、ドリルウォリアーに伏せが一枚

優勢だったフィールドがあつという間に入れ替わる

いや、それより気になることがある

「あのトリシューラのエフェクト……現実に干渉した？」

先程効果を受けた時、室内にいるはずなのにありえない冷たさの風を感じた

「それに召喚した時のみんなの反応も気になる………」

俺は考えに耽りながらトリシューラを見ていると何者かの声が聞こえてきた

『我が分身が宿りしカードを召喚する者がいたと思えば、我の存在に気づく精霊を従えし人間がいたとは』

「この声は………」

『ほう、やはり我が声を聞くことが叶うか人間』

声の主は眼前のトリシューラだった

そして声に集中していて気づかなかったが周りを見るとみんなの動

きが止まっていた

「こ、これは……」

『封印され、本体の半分に遠く届かない分身たるこの身でもこれぐらいは我にとっては兎戯に等しい』

これで兎戯に等しいだと！？

氷結界最強の龍の名は伊達じゃないと言っことか！？

『勘違いしているようだが、我が為したのは空間の位相をずらすことだ。時は止めれぬぞ』

ですよー

だが前にルミナスも言ってたな

空間を切り離したりずらしたりするにはかなりの力が必要だと

それを踏まえればトリシューラの實力の程が理解できる

『時間は気にする必要はない。位相を戻せばずらした時から一秒程しか時が経たぬようにしてある』

「まさかさっきマリナの動きが止まったのは」

『貴様が思っている通り位相をずらした。人間の小娘にしては中々のデュエルエナジーの持ち主だから試させてもらった』

デュエルエナジーだと？

あれは確か異世界編でユベルが復活するためにデュエリストから吸い上げていた……

「お前まさか!？」

『どうした人間？余裕がなさそうだが？』

「お前、マリナを生け贄に封印を破るつもりか!？」

トリシューラは邪悪な笑みを浮かべ笑い出す

『ハハハハ！貴様の言う通りだ人間！小娘は我が復活の礎にする』

「ふざけるな！そんなこと俺が許しはしない！」

大切な友人を、こんな奴の生け贄なんかにはさせはしない！

『吠えたな人間！我を止めたければまずはこのデュエルに勝つことだ。まあ、この状況から勝てるとは思えんがな』

トリシューラが余裕積積な様子で俺を睥睨しながら位相を戻す

絶対に勝つ！

あの野郎をぶちのめす！

「私はシューティングスタードラゴンの効果を発動！デッキの上から五枚めくってその中のチューナーの数だけ攻撃できる！」

位相が戻ると同時にマリナがシューティングスタードラゴンのモンスター効果を使う

「……チューナーの数はゼロ、よってシューティングスタードラゴンはこのターン攻撃できない」

ツイてる！

これでワンハンドレッドアイトラゴンが生き残る！

「ドリルウォリアーの効果発動！一ターンに一度、メインフェイズに攻撃力を半分にすることでこのターンダイレクトアタックをすることができる！そしてバトル！トリシューラでフレムベルウルキサスに攻撃！コキュートス・ゼロ・ブリザード！」

極冷のブレスが三つの頭からそれぞれ吐かれ、ウルキサスは腕に炎を纏うが一瞬で凍りつき破壊される

LP3000↓2700

「ぐっ……」

なんだ！？今の鈍痛は！？

「次！ドリルウォリアーでダイレクトアタック！ドリルシュート！」

ドリルウォリアーがドリル使って地面に潜り、ワンハンドレッドア
イドラゴンをすり抜け俺に攻撃を仕掛けてくる

「ぐあああっ!?!」

LP 2700 ↓ 1500

な……んだ今の痛みは……

気が……遠くなりかけたぞ……

『ほう？あのダイレクトアタックを受けて立っていられるだけでな
く、意識もハッキリとしているか』

「何をした貴様……」

気付けばまた位相のずれた空間になっていた

『ただデュエルを行うでは楽しみがないのでな、貴様には本物のダメージを受けてもらっている。いわば闇のゲームだ』

闇のゲームだと!?

『安心しろ貴様が負けても死にはしない。そしてダメージを受けるのも貴様だけだ』

「くっ……ふざけやがって……」

『我は封印されているのだぞ?これくらいの娯楽がなくては退屈ではないか』

そしてまた元の位相に戻る

「私はカードを一枚伏せる。そしてドリルウォリアーの効果発動!手札を一枚捨ててこのカードを次の自分のスタンバイフェイズまで除外する!これでターンエンド!」

ドリルウォリアーが地面に潜ってフィールドから消える

奴がいる限り俺はダイレクトアタックを受けなければならない………

早くどうにかしないとな

「俺の……っ！？ターン！」

カードをドローする瞬間、激痛が走る

だがこの程度の痛み……堪えれないで精霊界が救えるか！

手札は八枚……ハンドレスにするにはやや厳しいが……

「俺は手札のインフェルニティデストロイヤーを墓地に送ってダークグレファアを特殊召喚！さらにグレファアのモンスター効果発動！手札の闇属性モンスターを墓地に送ることでデッキから闇属性モンスターを墓地に送ることができる」

俺は手札のインフェルニティビーストを墓地に送ってデッキから三枚目のヘルウェイパトロールを墓地に送った

「俺はダークグレファアを手札に戻してA・ジェネクスバードマンを特殊召喚！手札から魔法発動！死者蘇生！対象は俺の墓地のインフェルニティデストロイヤー！」

インフェルニティデストロイヤーが青白い炎とともにフィールドに現れる

インフェルニティインフェルノじゃないぞ

「LV6インフェルニティデストロイヤーにLV3A・ジェネクスバードマンをチューニング！彼方より来たれり侵略者に、正義の鉄槌をくだせ！シンクロ召喚！起動せよ！レアルジェネクスクロキシアン！レアルジェネクスクロキシアンのモンスター効果！このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上の一番レベルが高いモンスターのコントロールを得る！レベルが一番高いのはシューティングスタードラゴン！よってシューティングスタードラゴンのコントロールを貰う！」

クロキシアンが怪光線を浴びせると、シューティングスタードラゴンが俺のフィールドに飛び移る

「シューティングスタードラゴンが……」

「魔法発動！死者転生！ダークグレファアを墓地に送ってインフェルニティミラージを手札に加える！そして墓地のヘルウェイパトロールを除外してインフェルニティミラージを特殊召喚！」

再びインフェルニティミラージュが俺のフィールドに現れる

「カードを二枚伏せる。これでまたハンドレスになった！インフェルニティミラージュの効果発動！このカードをリリースしてインフェルニティと名の付くモンスターを二体特殊召喚できる！蘇れ！インフェルニティビートル！インフェルニティデストロイヤー！LV6インフェルニティデストロイヤーにLV2インフェルニティビートルをチューニング！死者と生者ゼロにて交わりし時、永劫の檻より魔の竜は放たれる！シンクロ召喚！いでよ、インフェルニティデストラゴン！」

黒煙がフィールドを覆い、中から黒煙を吹き飛ばすようにインフェルニティデストラゴンが現れる

「インフェルニティデストラゴンの効果発動！ターンに一度、相手フィールド上のモンスターを一体破壊してその攻撃力分のダメージを与える！インフェルニティデスブレス！」

インフェルニティデストラゴンが黒い、煙りに近いブレスをトリシューラに浴びせる

「ぐおおおおっ！？オノレ！小癪なマネを！？」

「貴様はさつさと失せな出落ちバニラめ」

『ガアアアア！？』

プレスがトリシューラを半分程包んだ辺りでトリシューラは破壊される

「あぁっ！？」

LP1900↓550

これでマリナのライフはあと僅か

だが明日香は未だ無傷な上に破壊耐性をもつサイバーブレイダーが存在する

「ワンハンドレッドアイドラゴンの効果発動！一ターンに一度、自分の墓地のLV6以下の闇属性効果モンスター一体を除外すること
でこのターンのエンドフェイズまでそのモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る！」

いややっぱり

「除外するのはインフェルニティネクロマンサー！効果発動！墓地からインフェルニティと名の付くモンスター一体を特殊召喚する！蘇れ！インフェルニティデストロイヤー！」

ここは全力で一氣に終わらせるか

「魔法発動！ハリケーン！フィールドの魔法・罫を全て持ち主の手札に戻す！そして貪欲な壺を発動！俺は墓地のインフェルニティビートル三体とインフェルニティリベンジャー二体をデッキに戻す！」

カードをバラバラにデッキに差し込むとデッキがオートシャッフルされる

シャッフルが終わって俺はカードを二枚ドロウする

「手札を全て伏せてシューティングスタードラゴンの効果発動！デッキの上から五枚カードをめくってその中のチューナーの数だけ攻撃することが出来る！」

俺はデッキに手をかけて一枚目をめくる

「一枚目！チューナーモンスター、インフェルニティビートル！二枚目！魔法カード。三枚目！罨カード。四枚目！チューナーモンスターインフェルニティリベンジャー！五枚目！魔法カード。よって二回攻撃が可能！」

墓地のチューナーを全部戻さないと引けなかったな絶対

バードマンは自身の効果で除外されてるし

「バトル！インフェルニティデストロイヤーでサイバーチュチュに攻撃！デス・フレイム！」

デストロイヤーが右手を引いて押し出すと、手から黒い炎が出てサイバーチュチュに当たり余波が明日香を襲う

「インフェルニティデストロイヤーは手札がゼロの時、戦闘でモンスターを破壊した場合相手に1600のダメージを与える！インフェルニティフレイムパニッシュ！」

「きゃあああ！？」

LP4000↓2700↓1100

「シューティングスタードラゴンで攻撃！スターダストミラージュ！」

シューティングスタードラゴンがサイバーブレイダーに突撃する

「ああああ！？」

LP 1100 ↓ 0

明日香のライフがゼロになり明日香のフィールドが消える

後はマリナだけだな

「シューティングスタードラゴンで二回目の攻撃！」

遙が上空からシューティングスタードラゴンがマリナ目掛けて急降下する

「二枚目の速攻のかかしを墓地に送ってバトルフェイズを終了する！」

やっぱりあったか……

「俺はこのままターンエンドだ」

「私のターン！スタンバイフェイズにドリルウォリアーが帰還して効果により墓地からモンスターを手札に加える！」

なるほどあれで毎ターン速攻のかかしを回収するのか

「ドリルウォリアーの効果発動！攻撃力を半分にしてダイレクトアタックをすることが出来る！バトル！ドリルウォリアーでダイレクトアタック！ドリルシュ……」

「畏発動！次元幽閉！ドリルウォリアーを除外する！」

これでドリルウォリアーはフィールドから消えた

「私はカードを一枚伏せてターンエンド……」

「畏発動、マインドクラッシュ。チェーンしてさらに畏発動、インフェルニティブレイク。墓地のインフェルニティブレイクを除外し

て伏せカードを破壊。そしてマインドクラッシュの効果で俺は速攻のかかしを宣言する」

「あ……」

マリナの手から速攻のかかしがこぼれ落ち伏せカードの和睦の使者も破壊される

これで攻撃を防ぐ術はなくなった

「俺のターンドロー、バトル！インフェルニティデスドラゴンで攻撃！デスフレイムブラスト！」

LP 550 ↓ 0

これで俺の勝ちだな

『グウウ……………！？オノレ！オノレ！オノレエエエ！？』

「お前の負けだトリシューラ」

『コノ私が貴様ゴトキ人間ニイ……！？』

トリシューラの姿が徐々に薄れていく

しかし、そんな状態にあるにも関わらず切り離された空間を維持している

『こうなったら……ムン！』

「……！何をするきだ……！」

トリシューラが手をマリナに向けると白い靄みみたいなものがマリナから出てきてトリシューラに吸収されマリナが倒れる

『ククク……手土産にこの娘の魂を頂く！』

「何だと……？」

『肉体から魂が離れて時間が経てば魂は肉体に戻らずやがてエネルギーに変化する』

「貴様あ……！！」

『さらばだ人間！貴様のデュエルエナジーは手に入らなかったが代わりが手にはいったわ』

トリシューラは高笑いをあげながら姿を消す

それと同時に空間は元に戻り周りの時が動き出す

俺はすぐにマリナに近寄り抱き起こす

「マリナ！しっかりしろマリナ！？」

しかしマリナは返事をするどころかピクリとも動きはしない

隣にいる明日香も倒れていたマリナに驚いていたがすぐに気を取り戻す

「マリナ！？しっかりしなさい！？マリナ！？」

しかしマリナは虚ろな目をしたまま動かない

俺はマリナを抱え上げてひとまず保健室に連れて行く

保健室にマリナを連れていきベッドに寝かせる

鮎川先生の診断によればものすごく衰弱していてなおも進行中らしい

トリシューラの言うことが事実なら時間がない

鮎川先生にマリナを任せて俺は寮に戻る

夜になり俺は気分を落ち着かせるためと話を聞かれないように灯台までやってきた

灯台に着くと同時にルミナス、レイラ、リーザが現れる

『お待たせしました』

『ゴメンね、少し時間がかっちゃった』

『事が事だけに許して欲しい』

「気にするな、それよりどうだったんだ？」

俺は三人の報告に耳を傾ける

『じゃあまずは私からね』

最初にレイラが報告を始める

『他のみんなと一緒に数ある精霊界をザッと調べてみたの、そして
らまず氷結界の一族の世界は各封印が弱まっていたの。多分トリシュ
ーラのせいね』

レイラは魔法で氷結界の世界を映しだし、三体の龍が封印されている
場所を大五郎に見せる

精霊界は各次元にそれぞれ存在している

ユベルの起こした事件の折に強引に一つにされたがそこはまた別の話

『それぞれに三虎将が赴いて封印を強化してどうにかしてるみたい。他の精霊界も大変なことになってたよ』

氷結界の世界を映していた画面が切り替わり、別の世界が映しだされる

『ここしばらくの間に新しい能力に目覚めた人達が現れたらしいの』

『新しい能力？』

『うん。詳しいことは調査中だけどなんでもシンクロモンスターとはまた別のモンスターが現れたみたい』

シンクロモンスターとは別のモンスター？

はて？何か記憶にひっかかるようなひっかからないような……

『結論を言えば精霊界全体で何かしら異変が起こってるってことか

な
』

俺はレイラの報告を聞いて考える

やはり俺やマリナがいるせいでイレギュラーな事態が増えてきてい
るみたいだ

しかもマリナは……

「今は……いいか、リーザ報告を」

『うむ、妾は氷結界の者達に話を聞いてみた。内容はレイラとさほ
ど変わらぬ。ただ、交霊師が来てほしいと連絡があった』

交霊師が？一体何だろうか……

『内容は妾も知らぬ。故に大五郎が直接赴くのがよからう』

「わかった。最後にルミナス」

『……………はい』

ルミナスは恭しく頭を垂れて報告する

『まず、先程のレイラの報告のように精霊界全体で異変が起きています。私はすぐにジャスティスワールドに戻り多くの精霊界の情報を集めました』

ルミナスは手を翳し、レイラのように映像を映す

『インヴェルズ、リチュア、ラヴァル、ワーム、魔轟神などが動きを活発にし始めました。またインヴェルズが活動している世界はヴァイロンが介入を始めました』

想定していた以上に事態が発展していたことに驚いたが、イレギュラーが存在する以上仕方ないか……

「ルミナス、リーザ、レイラ、今から氷結界の世界に行くぞ。まずはマリナの魂を取り返す」

俺はルミナス達が開いた次元の裂け目に入り精霊界に向かう

マリナ……今助けに行くぞ!!

第七話『氷の国での死闘』（前書き）

今回は集中して書くことができました

だがしかしマリナのキャラが安定しない

大五郎も主人公のわりに精神的に打たれ弱い

まあいいか

第七話『氷の国での死闘』

精霊界は十二の次元に分かれている

今回俺が訪れたのは十二次元世界の一つ、氷の国がある世界だ

氷の国はリーザの国で、氷の女王が支配している国だ

氷の女王はリーザの母らしい、リーザ自身王女であるため公務があるのだが最低限必要な仕事だけやって俺の所にいるらしい

それでいいのか氷の国

そして今俺は氷結界の里にて氷結界の交霊師と大僧正と対面している

「この度は出向いていただき感謝します。本来なら私共がそちらに赴いて説明したかったのですが……」

「いや、緊急事態なのは重々承知しています。あまり気にしないでください」

深々と頭を下げる交霊師と大僧正に俺は頭を上げるように促す

「ありがとうございます。いや、噂に違わぬ素晴らしき御仁ですな
ライトロードキング
閃光王殿」

……この閃光王とはもちろん俺の事である

理由は、精霊界で修行をしている時にライトロードを従えて各次元世界の事件を解決したことから呼ばれるようになった

ライトロードのみんなはこれに関して、『まさに我等を従える者に相応しい呼び名』だと言っている

……正直恥ずかしいがな

「それで交霊師殿、危急の話ということらしいですが？」

「……はい、こちらをご覧ください」

交霊師が取り出したのは氷結界の鏡だ

「この鏡を使って私は封印されし氷結界の龍を操ることができます。そして彼らとコンタクトを取ることもできます。今回来て貰ったのは彼と話をして貰いたかったので呼び致しました」

「彼？」

「……………トリシューラです」

トリシューラと話をだと！？

「馬鹿な！？己の野望の為にマリナの魂を奪ったあいつが話をしたいとでも言うのか！？」

「憤る気持ちはお察しいたします。ですが、ひとまずトリシューラと会話をしてください。理由はそれでわかります」

俺は交霊師に諭され落ち着き、氷結界の鏡を覗きこむ

すると、鏡にトリシューラが映し出される

『……………おお、そなたは』

「トリシューラ……」

鏡に映し出されたトリシューラを見て俺は違和感を覚えた

そうこれは……デュエルの時に感じていた邪気を感じない

『すまぬ人間、我が闇に飲まれてしまった為に主らに迷惑をかけてしまった』

「闇に飲まれる……？」

『そうだ、我……いや我等氷結界の龍は強力な力を有しているが故に邪悪な存在に狙われやすい。今回の事も我が意思を邪悪な存在に乗っ取られた事で起こった。主らには迷惑をかけたすまぬ……』

そんな事情があったのか……

「……理解した。だが邪悪な存在とはなんだ？正体はわかっているのか？」

『おそらく……氷の国の隣にある、水の国のリチュアだろう。あそ

こは儀水鏡を利用した邪悪な儀式を行っている』

リチュアか……面倒くさい奴らが関わってるな

『今奴らはガスタに気が向いてこちらに強く干渉していない。多分、我を制御下に置いたことに気が緩んだのだろう』

「ならば、マリナの魂はどうなる？制御が緩くなってるなら……」

『いや、ある程度 of 意は確保出来てはいるがこうして会話をするのが限界だ。我分身と闇のデュエルをすれば我は体を取り戻すことが出来る』

「ならやることは決まったな」

俺は立ち上がり交霊師と大僧正に向き直る

「協力を感謝します。俺はこれよりトリシューラを解放するために戦いにいきます」

「……わかりました。ご武運をお祈りしております」

二人が頭を下げるのを見て俺はトリシューラの元に向かった

里の外に出ると、氷結界の封魔団がトリシューラの元まで案内してくれることになった

俺達は封魔団の後からついていく

「……大五郎」

しばらく歩いているとルミナスが話かけてきた

「なんだ？」

「……必ず、必ず勝ってください」

後ろを振り返って見て見れば、三人は不安げな表情を浮かべていた

「安心しろ、俺は負けない。勝ってマリナを助けだす」

そう言うと、少しは安心したのか三人は表情を和らげる

まあ、三人の心配もわからなくもない

相手は氷結界最強の龍トリシューラ

しかも前とは違って強さは段違いのはずだ

かくいう俺も不安だったが、三人の顔を見れば不安なんて吹き飛んだ

こいつらを悲しませるわけにはいかない

俺は必勝を胸に秘めて勝負に向かう

しばらくすると氷の祭壇らしき場所についた

そこには氷結界の虎将の一人ガンターラが待っていた

「お待ちしておりました閃光王殿」

「トリシューラは？」

ガンターラは言葉を発さずに祭壇の中央部を指差す

そこには魔法陣が書かれていて強い光を発していた

「あそこよりトリシューラが封印されている異空間に繋がっています。今入ればしばらくは出れなくなります」

「……そうか、ありがとう。俺は行く」

「……………」ご武運を」

俺はガンターラの横を通りすぎ、魔法陣の前に立ちルミナス達に振り返る

「行ってくる」

俺はそう言って魔法陣の中に入った

そこは例えるなら氷の中……と言っのだろうか

無機質な白い空間に透明な何かに囲まれてる……そんな感じだ

『ん？ほづ面白い、小娘を取り返しにわざわざ来たか人間』

そして、魔法陣の中にトリシューラと氷の中に閉じ込められたマリナがいた

「トリシューラ……!!」

『かかか！こいつはいい！餌が向こうからやって来るとはな！』

俺は何も言わずにデュエルディスクを構える

トリシューラはそれを見て笑うのを止める

『ほう？デュエルでこの小娘を取り返すと？いいだろう、だが貴様が負ければ魂から全て我が貪り尽くしてくれるわ！』

そっとうとトリシューラの前に巨大な石版が現れる

これが奴のデッキなのだろう

『さあ！始めようか！素晴らしきデュエルを！』

『デュエル！』

D a i g o r o L P 4 0 0 0

V S

T r i s u l a L P 4 0 0 0

「俺の先攻ドロ―！俺はライトロードパラディンジェインを召喚！カードを二枚伏せてターンエンド！エンドフェイズにジェインの効果でデッキから二枚カードを墓地に送る！」

『私のターンドロ―！私は永続魔法ウォーターハザードを発動！自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札からレベル4以下の水属性モンスターを特殊召喚する！私は氷結界の守護陣を準備表示で特殊召喚！さらに氷結界の術者を通常召喚！』

トリシューラのターンになると石版が音を立てながらフィールドに置かれる

くっ……それにモンスターが出る度に冷気が増してきている……

『私はカードを一枚伏せてターンエンド』

「俺のターンドロ―！」

守護陣の効果により、守護陣の守備力以上の攻撃力を持つモンスターは攻撃宣言出来ない

さらに、術者は全てのレベル4以上のモンスターは攻撃宣言出来ない効果を持つ

ただ二体とも自分以外の氷結界と名の付くモンスターがいないと効果を発揮しない

「俺はライトロードモンクエイリンを召喚！ターンエンド！エンドフェイズにジェインの効果で二枚、エイリンの効果で三枚墓地に送る」

『私のターンエンド！私は強欲なウツボを発動！手札の氷結界の軍師と氷結界の封魔団をデッキに戻しカードを三枚ドロースる』

トリシューラがカードをドロースると、ニヤリと嫌な笑みを浮かべる

『私は氷結界の舞姫を召喚。そして魔法カード氷結界ブリザードを発動！』

氷結界ブリザード！？デュエルターミナルのコンボじゃないか！？

『このカードは自分フィールド上に三種類以上の氷結界と名の付くモンスターが存在する場合発動できる。相手は魔法・罠カードを次の私のエンドフェイズまで発動できない！更に自分フィールド上の

氷結界と名の付くモンスターの数まで我はデッキからカードをドロ
ーできる！」

「な！？」

なんてチートカード！？

効果が反則的過ぎるだろ！？

『更に我は魔法カード調律師の失態を発動！自分フィールド上のチ
ューナーモンスター一体をエンドフェイズまで非チューナーとして
扱う。対象は氷結界の守護陣だ』

チューナーを非チューナーに？まさか！？

「！レベルの合計が……9！？」

何をするのかに気づいた俺を見てトリシューラは背筋が凍るような
笑みを浮かべた

『カカカ！己の無力さを嘆くがいい！我はLV3氷結界の守護陣と
LV4氷結界の舞姫にLV2氷結界の術者をチューニング！見よ！

これが氷結界最強の力だ！シンクロ召喚！氷結界の龍トリシューラ
！！」

トリシューラは自分自身をフィールドに召喚した

くっ……なんだ！？フィールドに出た途端に冷気が……

ピキピキ……

！？足が………！？

くそっ………！凍りついて離れない！？

『凍てつけ虫けらぁ！我がシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上、手札、墓地からカードを一枚ずつ除外する！フィールドからはライトロードパラディンジェイン！墓地からはライトロードドルイドオルクス！そして手札は右端だ！』

右端のカードはトラゴエディア………！

ピンポイントに撃ち抜かれたか………

『カカカ！トラゴエディアとはついているな。サレンダーでもしたほうがいいのではないのか？痛みがないぶんまだろう？』

「はっ……ぬかせ……サレンダーなんて認める気ないくせに……」

『わかつているではないか。バトル！ライトロードモンクエイリンに攻撃！アブソリュートブレス！』

正しい攻撃名はそれか……

等と考えつつ俺は手札からカードは発動させる

「ライトロードと名の付くモンスターが攻撃対象になった時、手札からこのカードを墓地に送ることで攻撃対象になったモンスターを守備表示に変更する！俺はライトロードガーディアンエイリックを墓地に送って効果を発動させる！」

大きな盾を持ったエイリックがエイリンの前に降り立ち、極冷のブレスを受け止める

徐々に盾が凍り、エイリック自身も氷像と化して砕ける

そして防ぎきれなかったブレスがエイリンを襲い氷像にし粉々に砕けた

『悪あがきを……このままターンエンドだ』

「俺の……ターン……」

強烈な寒さに体が言うことを利かなくなってきた

俺は氣力を振り絞り、カードをドローする

「ドロー！」

引いたカードはソーラーエクステンジ

氷結界ブリザードのせいで俺は次の自分のターンまで魔法・畏力カードを使うことができない

「俺はモンスターをセットしてターンエンドだ……」

壁モンスターを出すことしかできず、俺はターンを終了するしかなかった

『私のターンドロー！私は魔法カード浮上を発動！墓地からレベル3以下の水族・魚族・海竜族モンスター一体を表側守備表示で特殊召喚する！蘇れ守護陣！』

奴のフィールドに再び氷結界の守護陣が蘇る

『手札から氷結界の武士を召喚！そして二枚目の氷結界ブリザードを発動！これで次の私のエンドフェイズまで貴様は魔法・罠カードを使うことはできない！そしてカードを三枚ドロロー！』

嘘だろ……また封じられたってのか……

『LV4の氷結界の武士にLV3の氷結界の守護陣をチューニング！神槍の名を持ちし龍よ！我に従い全てを滅ぼせ！シンクロ召喚！現れる！氷結界の龍グングニール！』

奴のフィールドに二体の氷結界の龍が並び立つ

「冗談きついで……」

吹き付ける極冷の風が更に強さを増して俺を腰まで凍らせる

『グングニールのモンスター効果！一ターンに一度、手札を二枚まで捨て、捨てた枚数分フィールド上のカードを破壊する！我は一枚捨ててセットモンスターを破壊する！』

グングニールの口に光が凝縮され、セットされたライコウが破壊される

『ライコウか、警戒せずに攻撃したらみすみすやられる所だったか』

「最初からわかってて効果を使ったくせに何を言つか……」

くっ……体が冷えて意識が朦朧としてきた……

まだまだ……まだもってくれ……

『バトル！グングニールで攻撃！ブリザードランサー！』

グングニールが吠えると、グングニールの前面からブリザードがいくつも現れて俺に襲いかかる

「墓地の……ライトロードガーディアンエリックの効果……エリックとエリック以外のライトロードと名の付くカードを三枚まで墓地から除外することで、除外した枚数のターン俺は戦闘ダメージを受けない……エリックのこの効果はデュエル中に一度しか使うことができず、発動している間俺はバトルフェイズをスキップする……」

俺は寒さに震える手で墓地からエリック・ライコウ・エイリン・ケルビムを除外する

これで三ターンはダメージを受けない……

『ククク……私の攻撃！アブソリュートブレス！』

な！？ダメージを受けないのに何故攻撃を……

「ぐあああああ……ま……まさか……これが狙いか……」

『これは闇のデュエル。例えば戦闘ダメージは受けずとも貴様自身にダメージは与えられるものだ』

体が凍りついてるせいでまともに受けてしまった

くそっ……なんて威力だ……

『ターンエンドだ。ほらどうした？貴様のターンだぞ』

「俺の……」

手がさつきより動かない……

それに目が霞んできた……

「ターン……ドロー……」

ドローしたカードが見えない……

俺は記憶を頼りに手札のモンスターのセッとする

「俺は……ライトロード……ウォリアー……ガロスを守備表示で召喚……ターン……エンド……」

『私のターンドロー！二枚目の浮上を発動！守護陣を特殊召喚！そして氷結界の決起隊を召喚！LV3の氷結界の決起隊にLV3の氷結界の守護陣をチューニング！全てを凍てつかせる吹雪よ！逆らう者に天罰を下せ！シンクロ召喚！いでよ！氷結界の龍ブリューナク！』

意識が朦朧とする中、俺は奴のフィールドを見て言葉を失う

三体の氷結界の龍が揃っているのだから無理もないと思いたい

『我はリバーズカードを発動！永続罠！氷結界龍封陣！このカードは《氷結界の龍》と名の付くモンスターが自分フィールドに存在するとき発動可能。存在するモンスター事に以下の効果を発動する。ブリューナクが存在する場合自分フィールドのカードを手札に戻す効果を相手は発動出来ない。グングニールが存在する場合自分フィールドのカードを破壊する効果を相手は発動出来ない。そして我が存在する場合自分フィールドのカードを相手は除外することが出来ない』

……はは、マジかよ……

冗談きついで……

『我は氷結界ブリザードを発動。相手は魔法・罠カードを次の私の

エンドフェイズまで発動出来ない。墓地に氷結界ブリザードが三枚存在する時、このカードを魔法・罠カードゾーンに表側表示で置くことでこのカードが存在する限り相手は魔法・罠を発動出来ない。このカードがフィールドから離れる時、同名カード全てをゲームから除外する』

俺の体はほとんどが凍りついて、後は頭部しか残ってなかった

『中々有意義な時間だったぞ人間。全身が凍りついたら貴様の魂から全て私の糧にしてやろう』

……ちくしょう……意識が……遠のいて……

S i d e ー マリナ ー

暗い……寒い……

ここはどこなの……明日香は……大五郎はどこ……

助けて……誰か……

「……………！……………！」

誰……誰かいるの？

「……………！……………！」

え……？私は魂をトリシューラに奪われて大五郎が助けにきている？

「……………！……………」

だけど大五郎が圧倒的な力の差に屈しかけてる？

「……………！！！」

私が……大五郎を助ける………？

無理よ……今の私にできることなんか……

「……………」

語りかける？大五郎の魂に？

それで……大五郎は助かるの？

「……………」

……………わかった！やってやるわ！

大五郎！頑張つて！諦めないで！大五郎！！

私は力の限り大五郎に語りかけた

どうか……大五郎に届いて！

Side→マリナ→Out

《大五郎！頑張って！諦めないで！大五郎！》

「っ！？」

マリナの声が聞こえた俺は手放しかけた意識をギリギリで堪える

幻聴……………？

いや、今のは確実にマリナの声だ

全く……………また諦めてたか……………情けない俺は！

俺は意識をハッキリと取り戻す

それと同時に凍りつきかけた体は上半身が解放される

『む？まだ意識があつたか』

「飛びかけたがな。だが今の俺はさっき以上に熱いぜ？」

俺は体を動かして筋肉をほぐす

『だが貴様の意識が飛びかけた間にエリックの効果が終わわり、グニールの効果でフィールドはがら空きだぞ？』

目を向ければ確かに俺のフィールドには何もない

『我の場には我とグングニール、ブリューナクが存在して更に氷結界龍封陣に氷結界ブリザードが存在する。貴様に勝ち目はない！』

「ふっ……勝ち目なら残ったデッキの枚数分存在する！俺はこのデユエル……絶対に勝つ！」

『ほざけ！やれるものならやってみろ人間！ターンエンド！』

「俺のターンドロー！」

魔法・罾は使えないし破壊に除外にバウンスもできないか……だが
戦闘破壊はできる！なら戦闘でトリシューラ達を倒せばいいだけだ！

「ライトロードサモナールミナスを召喚！ルミナスの効果発動！手
札を一枚捨てて墓地からレベル4以下のライトロードと名の付くモ
ンスターを特殊召喚する！蘇れガロス！」

『正義の戦士よ！復活せよ！』

ルミナスが召喚魔法を使いガロスが蘇る

「墓地のグローアップバルブの効果発動！デッキからカードを一枚
墓地に送りこのカードを墓地から特殊召喚する！墓地に送られたウ
オルフの効果発動！デッキから墓地に送られた場合このカードの特
殊召喚する！LV3ライトロードサモナールミナスにLV1グロー
アップバルブをチューニング！苦境に陥る仲間の元に、覚醒せし正
義の召喚師は現れる！シンクロ召喚！輝け！ライトロードサモナ
ーマスタールミナス！」

『行きましょう！太五郎！』

「ああ！ルミナスの効果発動！手札を一枚捨てることで墓地のシン
クロモンスター以外のライトロードと名の付くモンスターを特殊召
喚する！現れる！ライトロードマジシャンライラ！」

ルミナスの隣にライラが現れる

『あらあら、あれでは私の力は役に立ちませんね』

『ですが、勝つための礎にはなりますよライラ』

『ふふふ、なら我らが王に後をお任せしましょう』

「ああ任せる！手札一枚をデッキトップに戻して墓地のゾンビキャリアを特殊召喚！ＬＶ４ライトロードビーストウォルフ、ＬＶ４ライトロードマジシャンライラにＬＶ２ゾンビキャリアをチューニング！光のもとに集いし戦士よ！今こそ悪をくじく剣となれ！シンクロ召喚！煌めけ！ライトロードソードマスタークラウド！ライトロードソードマスタークラウドがシンクロ召喚に成功した時、デッキから五枚墓地に送りその中のライトロードと名の付いたカードの枚数×５００ポイントエンドフェイズまで攻撃力アップする！墓地に送られたのは激流葬、ライトロードドラゴングラニコス、ライトロードダンサーリリーナ、ライトロードスピリットシャイア、ライトロードシーフライニヤンの合計四枚！」

『ば、馬鹿な！？』

「これでクラウドの攻撃力はエンドフェイズまで2000ポイントアップする！」

『攻撃力5000……！？だが一体だけならブリューナクかゲングニールで処理できる！』

「一体だけなわけだろう！墓地のスポーアの効果発動！墓地の植物族モンスターを除外して特殊召喚する！この効果で除外した植物族モンスターのレベル分スポーアのレベルがアップする！」

俺の右腕に赤き竜の痣、ドラゴンヘッドが浮かび上がる

「LV4ライトロードウオリアーガロスとLV4ライトロードサモナーマスタールミナスにLV2スポーアをチューニング！正義の閃光が集いしとき！闇に包まれた世界を照らし道を示せ！シンクロ召喚！闇を掻き消せ！シャイニングロードドラゴン！」

シャイニングロードドラゴン

LV10 ATK3500 DEF2000 光属性 ドラゴン族

シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外のライトロードと名の付くモンスター二体以上

一ターンに一度フィールド上で表側攻撃表示でこのカードが存在するとき、墓地のライトロードと名の付くモンスターを二枚取り除くことで相手フィールドのカードを二枚破壊することができる。この

カードが相手のカードの効果でフィールドから離れた時、このカードのシンクロ素材一体を墓地から特殊召喚する。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する場合、自分のエンドフェイズ毎に、自分の墓地からライトロードと名の付くモンスターを二枚除外する。除外できない場合このカードを破壊する。

光の中から白く輝く体に金色の角をもったドラゴンが現れる

修行の最中に俺はこいつと出会った

そしてこいつが俺のシグナーとしての竜

『な……なんだそいつは！？我が知らぬドラゴンがいただと！？』

まあ、百年近い先の未来で出会ったからな

「墓地にライトロードと名の付くモンスターが四種類以上存在するとき、このカードは手札から特殊召喚することができる！現れる！
ジャッジメントドラゴン
裁きの龍！」

上空から光が降り注ぎ、その中から裁きの龍が現れる

ライトロード最強の剣豪、正義の道を示すドラゴン、全てを裁く龍

俺の負ける要素はカケラもありはしない

「バトル！クラウドでブリューナクを攻撃！煌めきの剣群！」

『グウウ！？』

LP 4000 ↓ 1300

「裁きの龍でグングニールに攻撃！ジャッジメントホーリープレス
！」

『グアアア！？』

LP 1300 ↓ 800

「止めだ！シャイニングロードドラゴンで攻撃！ジャスティサンダ
ー！」

シャイニングロードドラゴンの金色の角がバチバチと音をたてて雷

をおこす

そしてそれがトリシューラの頭上で巨大な雷球になる

『ま、待て！？小娘は返す！！負けを認める！？だからこいつを…』

「正義の雷を受ける！」

そして雷球から巨大な稲妻がトリシューラ目掛けて落ちた

『グアアアアア！？』

LP800↓0

稲妻を受けライフがゼロになったトリシューラはその場に崩れ落ちる

凍っていた俺の体も解放され前のめりに倒れる

「痛え……寒い……」

何を言われたんだ？

「ルミナス？」

『ひゃい！？あ、あのそのななな何でしょうか！？』

「ジェニスに何を言われたんだ？」

『あう！？えとあのその……／／／』

どうしたんだ？

『ななな何でもありません！！と、とにかくトリシューラが元に戻ったのか確認しましょう！！』

「お、おう」

ルミナスが俺の腕を回して体を支えてくれる

ルミナスに支えられながらトリシューラの元に向かう

「トリシューラ」

『……閃光王か』

「大丈夫か？」

『……なんとかな。まさかあのような龍を従えていようとはな』

トリシューラはゆっくりと体を起こしながら答える

『さて……この娘を解放しようか』

トリシューラは側にあつたマリナを封じている氷に手を翳す

『むん！』

トリシューラが力を込めると氷に痺が入り静かに崩れる

そして中にいたマリナは氷から解放されると光に包まれ消えた

『娘の魂は体に戻しておいた。しばらくは消耗しているだろうが生
活するには問題ないだろう』

「そうか……ありがとう」

『元はといえば我のせいなのだ。むしろ感謝したいのは我のほうだ』

「それでも、だ」

しばらくトリシューラは俺をじっと見つめ苦笑する

『今の閃光王は難儀な性格をしているようだな』

「ほっとけ」

俺はそういつと痛む体に鞭を打って魔法陣に向かう

ルミナスに支えられてるおかげで柔らかいものが体にあ（ry

『改めて言わせてもらおう。閃光王よ、感謝する。我の力が借りたい

時はいつでもくるがいい』

「ああ、またなトリシューラ」

トリシューラにそう言ったあと魔法陣を発動させて俺は異空間を離れる

S i d e トリシューラ

魔法陣の光が消えると閃光王とその部下は消え、魔法陣も光を失う

どうせしばらくは誰もこないはずだろう

それにしても此度の閃光王は面白い

人間でありながらライトロードの正義を理解し積極的に精霊界の事

件を解決する

普通の人間ならこのようなことはしないだろう

何せ精霊界でのデュエルは実体ダメージを受ける

それ故に精霊達も協力を求める人間を選ぶ

だからこそあの人間は面白い

『ライトロードの王が現れるのはいつ以来だったか……』

かつて、同じように閃光王と呼ばれた男が一人いた

そういえば奴もこれくらい変わった人間だったな

時代が移ろうとも求める英雄は同じということか

『惜しいな……我が氷結界にもあのような男が欲しいものだな』

舞姫はああ見えてそっかしいところがあるからあれくらいの男が
ちょうどいいだろう

『いやそれよりも交霊師の婿として……』

ブオン

『よ、余計なお世話です!!』

『む、盗み聞きとは趣味が悪いな』

『わざと聞こえるように言っておきながらなにを言いますか!?!』

ちっ、バレたか

『だが惜しいのは事実だ』

『まだ言いますか!?!だいたい私は……』

『ライトロードの王は後ろで指揮を振るうのではなく前線で振るう。
故に死にやすい』

『……………！』

そう、ライトロードの王は前線で指揮を振るう

配下のものたちに自ら正義を示し士気を高める

あの人間も私とのデュエルであれだけのダメージを受けているにも
関わらず最後まで立ち続けた

終わってから倒れはしたが回復魔法をかけてもらっただけで立ち上
がれるようになった

普通の人間なら一週間は目を覚まさないほどのダメージを受けてだ

もうかなりの回数のデュエルを精霊界でしたのだろう

でなければ立てはしまい

そしてあの手の人間には厄介ことが付き纏うものだ

『あの人間……そう遠くない内また苦難に巻き込まれるだろう……』

今リチュアに仕掛けるにも、ガスタと小競り合いをしている最中だ

そうそう間に入りはしまい

『……交霊師、舞姫を呼べ』

『……行かせるので？』

我は返事をせずただ交霊師を見つめる

交霊師も交わした視線で内容を理解したのだろう

一度頭を垂れてから鏡で繋いでた通信を切った

『あの人間……大五郎と言ったか』

我は閃光王の名を思い出す

『……我ら氷結界の力存分に使え』

死なせはせぬ、あれほどの人間……死なせはせぬぞ

S i d e ｾ トリシューラ ｾ O u t

精霊界から帰ってくると夜から朝に変わろうとしている時間だった

俺は軽く落ち込みながらも寮に戻って起床時間まで仮眠を取ることにした

朝になり、明日香から連絡があって一緒にマリナの見舞いにいった

保健室に行くとマリナが上半身を起こして目を覚ましていた

俺と明日香は互いに喜び抱き合った

それを見たマリナにドスの効いた声で変態呼ばわりされた挙げ句正座をさせられた

明日香は自分の体を抱いて顔を真っ赤にしていた

ベッドの上で凄むマリナ、その側で正座してうなだれる俺、顔を赤くして微妙な距離を取る明日香という妙な空間が出来上がる

鮎川先生は「青春ね」と言ってて微笑んでいた

誰かヘルプミー

第七話『氷の国での死闘』（後書き）

今日はチートカードのオンパレードなお話でした

てか書いてて「マジ氷結界ブリザードパネエ」と思った

自重しろ俺……………無理か

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1950p/>

遊戯王～異邦人の行方～

2011年10月8日11時52分発行